

世一

世一  
奇  
連  
文  
德雨

紙上





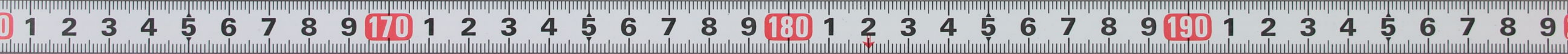
一冊子を巻直し代のは治なりとや

凡例



凡例  
 一冊子を巻直し代のは治なりとや  
 凡例  
 一冊子を巻直し代のは治なりとや  
 凡例  
 一冊子を巻直し代のは治なりとや  
 凡例  
 一冊子を巻直し代のは治なりとや

一巻の、一巻は治なりとや  
 一巻の、一巻は治なりとや  
 一巻の、一巻は治なりとや  
 一巻の、一巻は治なりとや



一 昭才三箇てのりけり 半の程のほしきり  
いふなり

一 松島獨作の之圖よ吹これもそむむ  
よこよあふのいほ人考つ  
いふことつ 意の申さく 後花美とち  
し化者もさふひりこち 辨きあの付  
去るあふさあふ海へゆり 又ら 後花  
の波後の板りもこれ八板の正し  
そけうけり

文化八年 未秋 花屋東奇淵

色蕉袖草紙上

浪速 花屋東奇淵拔

延寶九年

次韻

晋伯倫傳酒德頌樂天繼以酒玩  
讀青醉之續信德七百五十韻

二百五十句  
抜扱とあての仕たい花とま  
まことかさひてのまもあるく

管の足維控そく 踏そへて 桃青  
這勺以 莊子 可見 矣 其角  
禪骨の力たりのふぬるまこふ 才磨  
まくく凡のねよたりしに 揚水  
夏よきて 軒をかこる 熟云 角  
灯ふりりと 秘しけん月 青

微雨り麻りく山のあるうり 水  
粟と揮さく春原の守 九  
性雀登眉成客ふとびつらん 青  
慈悲舟の閑つれくうと 角  
風のとこ食ふ新の下成りす 九  
先祖成り知るまねの夜悟 水  
灯火成りく出雲と世なるこ 角  
古さゆぐぐ髪引くうけ 青  
武士のみあはれまよるくか 水  
女いなくく子さきとといひ 九  
極あ〜〜鏡のふつ〜たる眼 青  
いの猫の月成り肖りる 角  
鳥よとほく且易別易忘 九  
乳か〜の響のこ〜る青竹葉 水

春秋成花と食と〜暇ふれ 角  
白奥をくこすより餅眷れ宴 青  
寛平のおふ人極滑合あり 水  
清土松灯成極て睡る 九  
け〜と〜り〜る女成れ書きて 青  
血指のねま〜と板やあ〜らん 角  
あ〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜と 九  
獄囚正成あ〜〜〜〜〜〜 水  
天帝と目安成りて〜〜〜〜 角  
柱成極て星極を極 青  
雨の擔子風の〜〜〜〜〜 水  
秋と對して雨華堂の記 九  
白親仁孫紫村と〜〜〜〜 青  
渙の火氣朝成射る 角

師<sup>シ</sup>奥<sup>ウ</sup>の謙<sup>ケン</sup>も鯉<sup>レイ</sup>は指<sup>サシ</sup>成<sup>ナリ</sup>別<sup>ベツ</sup>る<sup>ル</sup>凡<sup>ボ</sup>  
安<sup>ヤス</sup>倉<sup>クラ</sup>の岸<sup>キ</sup>崎<sup>サキ</sup>は流<sup>リウ</sup>人<sup>ジン</sup>身<sup>ミ</sup>を泣<sup>ナク</sup>水<sup>スイ</sup>  
向<sup>ムカ</sup>後<sup>ゴ</sup>とて行<sup>ユク</sup>徳<sup>トク</sup>古<sup>コ</sup>の境<sup>サカイ</sup>を角<sup>カク</sup>  
拍<sup>ヒキ</sup>起<sup>キ</sup>し初<sup>ハジメ</sup>音<sup>ネ</sup>の魂<sup>タマ</sup>ちの龜<sup>カメ</sup>青<sup>アヲ</sup>  
忘<sup>ワシ</sup>人の往<sup>ユク</sup>も似<sup>ニ</sup>ころり着<sup>キ</sup>部<sup>ブ</sup>水<sup>スイ</sup>  
雨<sup>アメ</sup>成<sup>ナリ</sup>くぬるう風<sup>カゼ</sup>も書<sup>カキ</sup>丸<sup>マル</sup>  
夕<sup>ツキ</sup>暮<sup>ク</sup>の息<sup>イキ</sup>も烟<sup>ケ</sup>成<sup>ナリ</sup>ち思<sup>オモ</sup>ひ青<sup>アヲ</sup>  
民<sup>タチ</sup>屋<sup>ヤ</sup>あつて後<sup>ノチ</sup>成<sup>ナリ</sup>せむる角<sup>カク</sup>  
突<sup>ツキ</sup>の本<sup>ノ</sup>愁<sup>シユ</sup>る草<sup>クサ</sup>の野<sup>ノ</sup>ハ昧<sup>マク</sup>く丸<sup>マル</sup>  
又<sup>マタ</sup>あかがる海<sup>ウミ</sup>邊<sup>ヘ</sup>の古<sup>コ</sup>屋<sup>ヤ</sup>水<sup>スイ</sup>  
力<sup>チカラ</sup>あらん言<sup>コト</sup>尾<sup>ビ</sup>く手<sup>テ</sup>向<sup>ムカ</sup>れ丸<sup>マル</sup>  
表<sup>ウラ</sup>れと又<sup>マタ</sup>成<sup>ナリ</sup>踏<sup>フミ</sup>る扱<sup>オシ</sup>終<sup>ハシ</sup>青<sup>アヲ</sup>  
後<sup>ノチ</sup>置<sup>オキ</sup>し小<sup>コ</sup>社<sup>ヤシラ</sup>も何<sup>ナニ</sup>とあはれ水<sup>スイ</sup>  
朔<sup>シツク</sup>々<sup>々</sup>抱<sup>オモ</sup>えしとどめおとろく丸<sup>マル</sup>

花<sup>ハナ</sup>も照<sup>テル</sup>る大<sup>オホ</sup>神<sup>カミ</sup>宮<sup>ミヤ</sup>の奇<sup>キ</sup>持<sup>モチ</sup>也<sup>ナリ</sup> 青<sup>アヲ</sup>  
幣<sup>ヒ</sup>も菓<sup>ワガ</sup>つらる<sup>ツラ</sup>託<sup>トク</sup>の<sup>ノ</sup>も角<sup>カク</sup>

次韻

雁<sup>ガシ</sup>もやうとらふ  
みよまは成<sup>ナリ</sup>ころり

春<sup>ハル</sup>沈<sup>シヅ</sup>むと橋<sup>ハシ</sup>石<sup>イシ</sup>もとどろあり 其<sup>ソノ</sup>角<sup>カク</sup>  
今<sup>イマ</sup>年<sup>ネン</sup>は林<sup>ハヤシ</sup>系<sup>ケイ</sup>成<sup>ナリ</sup>森<sup>モリ</sup>もて 女<sup>メ</sup>角<sup>カク</sup>  
月<sup>ツキ</sup>成<sup>ナリ</sup>連<sup>レン</sup>も坐<sup>マ</sup>鳥<sup>トリ</sup>帽<sup>カブト</sup>もどわつこ 揚<sup>ホウ</sup>水<sup>スイ</sup>  
箒<sup>ハシ</sup>も法<sup>ホウ</sup>利<sup>リ</sup>成<sup>ナリ</sup>おろころりや 抛<sup>ナゲ</sup>青<sup>アヲ</sup>  
おぼこさ川<sup>カハ</sup>流<sup>リ</sup>草<sup>クサ</sup>の葉<sup>エハ</sup>成<sup>ナリ</sup>丸<sup>マル</sup>  
早<sup>ハヤシ</sup>山<sup>ヤマ</sup>路<sup>ヂ</sup>も銚<sup>シウ</sup>とせける角<sup>カク</sup>  
夕<sup>ツキ</sup>あゆる暮<sup>ク</sup>もかすかよるを青<sup>アヲ</sup>  
夜<sup>ヨ</sup>盜<sup>タク</sup>招<sup>マコ</sup>風<sup>カゼ</sup>の音<sup>ネ</sup>成<sup>ナリ</sup>合<sup>アヒ</sup>も水<sup>スイ</sup>  
雨<sup>アメ</sup>の園<sup>エニ</sup>もとけて敵<sup>テキ</sup>もとせたる角<sup>カク</sup>

舞臺よは本の扇は打戸丸  
とひやうにうい氣よ世は驚き水  
大をつくまき夢のうさし青  
移りめ侘て雪の炉小根源温丸  
あしつらいつく帳の紙室角  
女の歌うつるこころを致すこく青  
若氣ききあしてやつれ潤る水  
ストント茶入落してい余も角  
とりあえ守ねおけり月丸  
秋の末つくと暖縁地通水  
つらうて  
落の院の市凌成とよ青  
危ゆる舎人の花よかろめ丸  
又世の番城寅よ歌て角  
渾沌翠よよきて氣小好く青

朝咲あしむる麻くの山水  
そのつれ女房よ長のりるあうり角  
吉原君代ぬこころいさなり丸  
棒軍勇やつふせよ止つて水  
はきく世の陰より拵よ弦引青  
富の屋城徳めまのちりきん丸  
摩訶石生苦茶園よ生ル角  
愛ヲ捨子ヲ捨毗盧遮阿毗羅咩青  
嵐と落て風とやつらふく水  
夜の食えしと森えたる以角  
蛸の舌とく耳よ振る丸  
月の秋うらむと夕の且夕水  
あしつらいつく味り落餐奇  
ものりて鏡よ歌の秋も丸

繪と酒りの興をて匠角  
小波くれば本花よ常さうとぞ青  
納戸の神成齋モイ——モイ水  
煉掃之礼用於鯨之脯ホシ角  
やといの翁齒菜刈入丸  
風いそぐ牛とへ氷色りる水  
荒屋よるの括屨とく青  
おそろしく白骨のうみ付て丸  
曾呂利新伝城漢は叔世角  
禅小僧定齋は月の詩を刻キキ青  
雷スリハチ益鳴て色益とる風水  
花の今報キキ返は羊成連切角  
揺るおとらぬはゆると比志丸  
三 不常モイとい息モイ去来の電成掃水

そが成るてきく有とる人青  
雨のわらりの枝よ葉下モイ丸  
山花露をがいて矢りり角  
云のいふ寸人の比モイはるは青  
木蓮のよきしを本花の唇水  
細敷の鬼灯の燈籠とら丸角  
踊持衣の振ふたり波丸  
酒の月所伽坊まの夕棠水  
真素流しやる奥の泉青  
仁智の葉よむれは瓜とつ角丸  
ほゆよまたえて陀モイは角  
葉地あつ根の底小車止り青  
天モイ火く周の令振の青水  
観江の波モイき岩号は白流と角

青海蒼々しい嶺岑と彈丸  
花の首不逞は旅泊賞の  
方は秋とふ赤金の傍青  
淋しい瓜葛まよは下と互依丸  
夕照をまゝ食居ひいり角  
枕の本心輝かぬ外に森こ  
松の清水も蓄たぐい水  
夏の身成何と鏡ふらふて角  
我は信ひにまよふこころ丸  
生はくは流れての念を量水  
沈河清て雨の火青し青  
竹の奥下まう系に答のり丸  
狹の里は足ありの鍋角  
配所人声のこゑ市城下はと青

あゝ光の菌辛螺と松と水  
心はやむ細く針をん生ふ角  
甲は又危多と出い山丸  
麦聖れ豊の芝城さし水  
勅使茶原の朝臣蕪坊青  
秋成啼鳥の色成まへとし丸  
夏やその人の世真さね角  
津のふれ生田の表の初夜度  
道とよたけまを念接す水  
霜下りて文り里の粥配り角  
寺くの納豆の声行とつ丸  
よはくれき捲花の光と流水  
園はあふて小井のゆりし青  
勝とそ流る我の流水とこい角



辰よりかかれよ牛車一たる丸  
井の戸城人侍下女も麻ふれ水  
舟をほりてよ眼をくま青  
泪のこもほりくまをれい  
千しを成くさりのあの煙本角  
美作ひてす花をさる青  
如泉法昨のま力あり水

次韻

そよよと家立ハ秋の舟中舟丸  
泳たくたふおびたけ実揚水  
あつれくち子い茶ふうく旅  
舞こひをたり海嵐ゆく其角  
言の客英の客とふまへ水  
獲珠の身に歌を彼ら丸

楽和りの隠て風流共入角  
携よ好縁をさせてあはれ青  
娘一と帯女房のさしてはね丸  
忘あつれたる身も付は水  
巻きてはの板をさくら紋青  
括ゆく宿よまをさうむ丸  
髪長の位らん屋へ道し水  
軍勢婆の男ゆきと相丸  
骨刀土急禱のまられ丸  
瘦たる馬の靴も鞍お青  
内よと懐てもむいさのし舞後丸  
茶とく巻の耳ふあけ水  
信もかひて養子たたく秋青  
を浅屋土とく羽原き角

筆耕寸青葱の牛よ花付て水  
燕菜の流くむら 青丸  
后宮れ教入車やとりふる角  
祓たりや上の御若く風の縁 青  
刃中がつれまけて衣のを踏む言丸  
挑灯切て衣のうけろひ水  
風前の角内と身成悟く々か 青  
入の山ふま狼よのり角  
雷の斧下くしそまんに水  
去入まらー龍頭の圓丸  
俗よつ入麻屋の海の底あふ角  
羽の目れ赤本地赤 青  
何故是て蛤の縁てまをる丸  
ひそくくと雨義がもる水

力松葦夕草の葉の月好丸 青  
粟刈 敷て園子下と丸 角  
水汲記て帯尋る丸 水  
登りあふへい志のひこふる丸 角  
櫃と子よたくさる丸 青  
古家の縁き園よま丸 丸  
わたらの糸丸倉風の荒ふる水  
麻の葉よ生る小袖と打て 青  
町に於てはふる生の浦抽子角  
死にぬくて清に隣城位丸 水  
明て糸ごごぬけ後と丸 丸  
昼夏の食たく粒よ丸 角  
人死を待て生る丸 青

石、曰花のりてたぐ咲にたり丸  
 木玉に、なで風城舞柳水  
 三 飛雨、急の流、いそぎ、空キリ青  
 驢馬の進、ごり、舛キラ、く、角  
 大根の葉、紙の裏、れ、こ、あ、ご、う、水  
 雲の、く、く、銚、よ、文、付、て、やる、丸  
 表、や、大、桶、の、櫃、の、腰、を、丸、角  
 有、候、一、床、ふ、ぬ、と、人、引、ご、る、青  
 り、や、く、と、産、入、り、の、く、く、く、丸  
 通、い、に、舟、の、位、て、た、く、と、む、水  
 送、ひ、一、は、恨、の、糸、の、目、う、け、塚、青  
 換、を、お、お、助、後、い、一、く、れ、角  
 今、春、方、に、村、風、と、や、一、三、味、線、と、水  
 や、さ、一、や、さ、く、れ、後、ご、り、丸

秋の、衣、服、切、州、紙、ご、り、丸、角  
 佐、持、の、ろ、ろ、一、て、め、る、葉、の、戸、青  
 面、白、く、盛、曲、杖、お、ひ、一、丸  
 海、老、ち、し、した、る、海、苔、の、青、衣、水  
 急、崎、の、松、く、娘、の、こ、れ、は、巻、青  
 髪、世、よ、み、み、る、を、お、け、め、神、角  
 ト、同、一、鷺、の、音、の、ま、く、と、水  
 蛇、の、氣、を、て、草、の、丸、ひ、丸  
 笹、原、に、皇、居、よ、う、れ、紙、張、物、角  
 清、水、の、司、麦、と、つと、摺、青  
 い、つ、と、糸、る、法、味、も、の、習、を、て、丸  
 老、尼、ご、り、あ、り、ま、り、水  
 表、飾、る、於、子、拾、ひ、は、遺、一、て、青  
 外、里、よ、産、の、話、引、て、角

和舞よ道一ゆくの松の青  
葉の梢よ有唯のいざ丸  
侘竈よコカシキ松の青取よなる角  
足袋よと宿に風をよ青  
扇折る女の髪よ終られて丸  
まの江戸よ急わよ色咲水  
むすよと歩よほよ懐てやう青  
乾ふる葉のよふもとらて角  
おくに来て上るう澄る声細水  
法眼うせよ武志給とやん丸  
宮造らるるの通の名系よと角  
慶平の冠の櫻よ折うけ青  
綱なる葉のうらむれ砂丸  
故園今よとらん蘭腔一水

丸

風の月熱の清雪松結ゆる青  
葉かろ小傍の怪よとよ角  
山路よくいらの松とよとれ水  
篠の枝折成猿よ折る丸  
雲の袖と深く急のよ記青  
氣とろろれよ人の抜る角  
血成端て凡を力成折る青水  
右背かよとほて控よ折る丸  
折られて花よ抜る青角  
抗ハ酔て醪醸よ入る青

天和三年

鹿栗

酒債尋常往處有  
人生七十古來稀

詩のそんと年成貪る酒債其角

冬湖日暮て駕馬 鯉其角

干鈍さ夫よ実成りる人

三依人の鬼成泣く其角

力い社かうろた睡る膝其角

鴨の羽くくお寂死其角

瓢ちりぬ信成りる料其角

雨 山崎 傘成其角

舞牛のこてしと蓋に降る其角

持場の雪よ恙殿と云其角

一の姫里の床およき其角

斬名よたつと云歌と責其角

清も怨の雲と帯其角

うさよ又沈むき食の腹其角

下

背へ花を負重し蓋へ人依其角

芭蕉めくしれ煤丁其角

腹もぐる術指むるふとや其角

鏝其角こして森ぬ板柱ぬ月其角

舞入の道はくまに其角

たぐい戸んて葛う其角

初りそ美逢ハ晴其角

黒鯛くろしおと女其角

拈尾髪榮探の角成其角

魔神と使し荒海の崎其角

鐵の弓矢猛と世其角

帛其角 姫れあ其角

山其角 四睡の床成其角

うはと火流て指の灯其角

下司后朝成社とて力と字  
西氏成後と包むあやふく  
表れいふふ保時ほく吹調々人  
みちのくけ美あしぬる日角  
武士の體の丸麻まふくく  
八声の約の雲我若はく角  
詩あそんと花成食う酒債れ  
美湖日くれて駕典吟

天和三年

虚栗

憂方知酒聖  
貧始覺錢神

芭蕉

花より此世成我酒なく食  
眠とらくを陽たの 瘦一品  
鶴啼て青峰夏成陽の川 嵐雪

主

童子操とち折る唐梅 具角

力成偏を汀の夢とす列て 嵐  
浪のそくまよたふと物りけ 筆  
花魁洗ふ雨より朝の明もは 晶  
朝よ馬帽子成ふろふ紙衣蕉  
浪人の意とる成あうう背りん 雪  
やぶれ一およ入りひそふ死 蘭  
まささうら日し紫青成抱えひく 角  
藤の退之の肝魂を奪 晶  
雷鳥のそくまよは角成あうう 蕉  
ゆてら海より 鯉 孕る 雪  
碩峰の鏡成捨し林代り 晶  
羽織より角成限を風流雄 角  
仇しおく 推成出て料の力 蘭

破蕉撰て詩の上ラック雪  
朝鮮は西此と稱る遠き  
はくしきぬ火の松浦行捨晶  
りつゝさるあけをくの萱庇雪  
蚤ハ松の屋哉のし蘭  
掃入ぬ熱ハ六十の荆もて  
御所は胡瘡らく世哉夷之蕉  
人の怪異摠長の家の獅子馬晶  
松田首なき雪の暖雪  
ささるや陣中似せ野うく蘭  
ふ野は飢て録以貪る角  
盗み奪れ存は伯夷は足洗は蕉  
とくさい武士の憤<sup>イキナリ</sup> 叶<sup>ナリ</sup> 角  
見くく<sup>イ</sup>記懸を或やくや葉抱蘭

英ひさ人や不降る鬼  
曉の霧云哉母はさあはて雪  
はひはあふあははさうり蕉  
くれは柵廬山の列とねたん角  
柳はまをひて瀑布は酒呑 菊

草のそよ我の夢うよはるうれ 其角  
藁よ我のめりうよをのこくれ  
深川菴

芭蕉舟分して鹽と西松を我  
ふつうし雨のこひをさかして  
はよふもさうらねる紙のやう紙

天和四年 貞享改元  
幾世よんもせぬのねさる

何事院も花よ来小なり言に  
二重人の夢よ

月花のこれやアとのまよ  
平とくます 正ムツキ月ハ梅はるさ  
破屋破成ららるるを丸の声  
そとらきこしや

秋十とせ 入つてはるをさす故々  
雨あつて山をれきにくらなり  
芳しうれあ士とてぬれをたせしる  
る上

夏への木槿はるま 倉まら  
第キ川もそとらるるぬれまの  
路あり 倉との槿てやりて

様とア人控まは秋の風い  
杜牧の早行の詩よ小秋の

中山の山をうりて 忽ち  
馬よ森て 秋は月を 紅葉の壺

外宮市焼ふん して  
又うしもきこ 時のは風を  
まむとらう して

二十日かか せの秋はる  
西行谷

翠あらし 女をりあは 秋はる人

ちりり 田里小志とて せら  
路あり ちりり 田里小志とて せら

高麻さ 庭上の松はるらん凡  
千里も 入るれん 秋はる人



も仏強よひてきて今も  
をすぬれらるる母よ

侯蘇いづく死にけり  
のね

曾母あるに一故とて

藤つてつれなきせよ  
切らぬ

西上人のまの房の  
行と其の

陀より二はくを  
入るとりし

の法水至今も  
ありしと云ふ

参とうしつらみ  
かたきと

後醍醐帝行後

行廟年と記して  
志りふ行と志りま

不破

秋のそらも  
色も不破の国

### 冬の日

雪の長途の雨  
ふころい旅衣の

ところへの  
飛たつたるに

なるい人我  
さへもなせなる者

花雪の文士  
はふなとりしに

ふとありひ  
出て

花雪風の  
牙の行舟は  
思ふる哉 芭蕉

たそやと  
とらるる望の  
山茶花 野水

有明の  
ま水又酒を  
つらうせて 持公

か  
うの落と  
うらふちり 重五

朝鮮の  
ほそりとも  
花の白ひま 杜園

日の  
ちりりし  
ふ花は茶  
花哉 正平

我菴の  
落葉ま  
ちりりし 水

髪と  
やとらる  
花志の  
ふ花のほと 蕉

かたつりのつしと乳故青う控 五  
こえぬ幸塔は女はとくと径 兮  
奉書 乾法のかりつつききとく火を焼て 無  
つる一の多はたこ一虚家 圃  
田中おるこようんち柳あるところ 兮  
書よふぬや人いちんもり 水  
たそつれか様と泳むか細し 圃  
隣さう一まの所よ下りある 五  
二の尾よ近傍の花のほろりたぐ 水  
珠はむろろふととろり鼻うむ 無  
宗りおよ羞をく教おほらふら 五  
いよそ恨の矢とこふつらうの 兮  
ぬを人の記念のねれ次をけて 蕉  
志と一宗紙の名を付一水 圃

五

まぬきこを種も濡るお時雨 兮  
冬うれふてひとり庵 蕉 水  
あろしと碎け一人の骨は 圃  
烏絨はまはすの圃の古 五  
あてれその魁もまけ敷云 水  
秋あ一斗とつくと教そ 蕉  
日東の李白坊よ力とえて 五  
甲よ木槿とことむ花苞あ 兮  
牛の径とぬらぬまはれ夕暮に 蕉  
眞よ鯨の真珠いこくま 圃  
ころいのりめ方の星守むへく 兮  
書よの妹の眉をこにゆれ 水  
後ひとく居る湯は志望の花邊 圃  
廊下の藤のこけつやあ 五

冬の日

わが(ら)の(ら)年

やう(ら)の(ら)と(ら)を(ら)と

紅雲はあけくも騰るこぼる

野水

霜よやうこつるの露の食 杜園

雪よあまふたつめくほのほをれて 芭蕉

うつろぬれれと車引り 持雪

磨丸社又鶴教とつらぬ 重五

枕巻と手折貞徳の富 正平

雨こゆる浅香の田原のりて 國

奥のまきこつれと只あはれまふく 木

床つけて寝まひいとこある男 子

縁さぬたけの恨のこりり 蕉

口とくと痛とちたるかなん 水

内角ハカととこは首送るん 五

夫

おこたに盃とせし川祖ひ蕉

方ハまうれ牡丹盗人 國

繩あまのわさのやれ登るて 五

とつくしとのまはる切ら町 分

とつ花のまはる春のつめり 國

香いらくのまはるうのゆれ 水

梅箱よ條とらる紅はのまら 分

うらむと記よ紙燭とらる 蕉

露ふかく積り掃の帯とらる 水

三味線うしん不破のせえ人 五

及とらうる炭はておらる茶はら 蕉

紅とまきくのさてし七十 國

奉加りた柳堂よ黄金寺のい 五

いづれの傘北下奉りた 分

蓮池は雪の子よとよゆ言  
言よもはくく病やと成る  
力よたてる唐橋の髪集れて  
意とぬ石 跡跡とよ川  
秋輝の虚よ声さくまつこい  
藤の葉はたふ糸はらちり  
後より現成ひさき山陰に  
ひらりい典侍の鳥々内侍の  
三ヶの花鸚鵡尾ふりのもつさ  
まろくまといとむ紙の掲活外

冬の日

秋をいり年  
まろくまといとむ

けみうて力より病はまぬ

杜蘭

さほりあまりく水のいれ妻  
遠朶の系紋初踏人の笑に負て  
山の市門はねしあけの春  
馬糞くくふさじ風のきうん  
紫の湯者おしむ神の痛英  
くらたけと物よむ娘のつみて  
地籠ふさ山よなまけくさ  
赤あ萩のこまふ力を撰くれす  
蒼麦と一着し溪 賀樂の坊  
娘有夜双六くらの娘藤して  
紅花買ふ及よ時鳥さく  
志のよちのこととて能成他  
命婦の老より采ふんこと  
ゆきまては浪の水に流れり

重五

野水

芭蕉

荷台

正平

五

園

蕉

水

園

分

水

五

分

佛喰へたる奥解とろり  
縣ふる花見入部と作られて  
五形董の島 六 反 四  
ろれいまに物る重雀ちりしと  
ま魚の馬の眠と顔あり  
水 出うとよや矢矧の橋のそらふ  
國 六 反 四  
松とよとてまうぬ  
水 於しよはは木刈をふのひつゝ  
五 海月伝とむく刀賣年  
五 雲のね長の國は差めつじ  
五 縁よ高尾り行袖かぞく  
蕉 ちく人と指と指ふ春居さん  
五 芥子のいしくよ名はこはは  
禪 四 三ヶ月のいりい晴く  
後 了る

秋湖りけくよ琴うて  
者 水 意きふと心かして  
穀と及る 四 声うれ念  
佛と穀とをさつる  
兮 かけうとまき  
行燈けいれ記後て  
水 ねとひくのゆも  
夜の帯引 五 ころれ  
花たましいまけに  
兮 どのをれ日  
私我もむれしと  
蕉

冬の日

かきこつがら火燒家  
そけいせれと

寒堂のおのり  
けりこそまらぬ  
重五 ひとの病いと  
鏡磨きむ 荷兮  
花棘馬骨のそ  
およ笑うつゝ 杜圓  
鶴える意の力  
うけりなり 野水

風吹ぬ秋の日籠る酒ふき日 芭蕉  
 秋織らかごと市に振する 羽蓋  
 かみ川や胡麻ふ代あや(近) 兮  
 いとつらの舞かろりの比 五  
 ねりへと布揃うと家々をれて 水  
 うさとい廿十紙裁ち 三平 圃  
 控られてくぬろろ舞はれふれも 笠  
 火おりの火焼かき人とえん 蕉  
 門ちの暮よ紙まわつて藤る 五  
 血力うくと力のうききに 兮  
 考あつて卒脚の程七ツきく 圃  
 冬さりの納豆たぐくまじ 水  
 とれよは梅の徴ととにける 蕉  
 宿ものいとほ敷冬を吞 五

白燕濁らぬ水は羽城あふひ 兮  
 宣旨かこころ<sup>カキ</sup>知と待ら 五  
 八十年の三ツつら童母とらて 水  
 ながりたちをむる七夕のつゆ 圃  
 西南よ桂のふれのつねむら 笠  
 蘭のあふらふト本くら音 蕉  
 船の家よ賢ふら女んてうら 五  
 弱籠よ栗城はく日<sup>カキ</sup>の巻 兮  
 とるききて<sup>カキ</sup>せしとがらふ力に 圃  
 はくも手向る舟雲のえ 水  
 寅の目れ且と船波の疾記て 蕉  
 ちかうハハ南京の地<sup>カキ</sup> 笠  
 いがれして<sup>カキ</sup>陸とともぬ合像 兮  
 流よろろの清き舟の根 五

鶺鴒ふらふつき花あけり 水  
物衣の下ふ程うらもくつり 兼  
小の方おくりしを廉おやして 兼  
藤らまぬ夏衣賣らむ雨 國  
冬の日

田家眺望

三五月や鶴のいづかひかき 荷  
冬の旅日のたれありり 芭  
かし山泉の体と木は葉つる 重五  
お死する牛の位はほまじ 杜  
音もふき具足ふ力のふんし 羽  
酌する壺前切りよいて 野水  
秋のころ旅の所連歌はに 兼  
陽く晴して富士足ゆき寺 兮

寒として椿の花の落る音 國  
糸よ糸ゆへとそむく風の音 五  
雛子返る烏帽子の女五十三 水  
庭よ木曾作るとしの落衣 兼  
おけふは山橋よ梅見ぬ 兮  
麻ころりしつゝの集あむ 兼  
江を迫く獨樂庵と世松控て 五  
我が出よふははるなる 國  
たひ衣笛は落るははら拂ひ 兼  
龜興ゆるは木尻の山のひ 水  
骨伝はして坐は酒をわらう 兼  
乞食の義衣は世のゆめ 兮  
泥のうらたは引籠を捨てて 國  
市幸は進む水のみるごとく 五

終よる年の小角豆のむら  
昔屋よりつゝは冬固しく  
けしつゝのふ坊文よおひれて  
おろく蓮の葉なる蓮の葉  
静りこふ飯屋のそくが  
を落おくきつゝ風やぬ  
約物よ屋根おくれなる  
豆腐焼きて母の喪よ入  
元政のまの後も破れぬし  
伏見本懐の種くれぬ  
まのまの男描いとつと  
まのまの雪掃かよ  
水干が秀白れいとつと  
ふ茶室よ何んまのこ  
世

冬の日

いづれとよと雑面牛ぶく  
指火ふあふらうれ  
とくは外下忘に  
捨置よ言然やつと  
張よ捨うらん  
ひくうよ橋おと  
世

熱田三歌仙

あつこはなうら  
あつこはなうら  
あつこはなうら

海られて野の声何のふ  
串よ鯨をあふる  
二百年我け山よ谷  
控の種さく秋ハ来  
入る力よ鷄の  
駕ふき國の  
世



降雨の光くる母の涙うと山  
一ツん<sup>ツ</sup>ん<sup>ツ</sup>一<sup>ツ</sup>荷葉の 意 葉  
基の工<sup>ツ</sup>二<sup>ツ</sup>日<sup>ツ</sup>と<sup>ツ</sup>ら<sup>ツ</sup>る<sup>ツ</sup>同<sup>ツ</sup>と<sup>ツ</sup>り<sup>ツ</sup>て 蕉  
周<sup>ツ</sup>と<sup>ツ</sup>帰<sup>ツ</sup>ら<sup>ツ</sup>と<sup>ツ</sup>孤<sup>ツ</sup>お<sup>ツ</sup>く<sup>ツ</sup>好<sup>ツ</sup> 葉  
靈<sup>ツ</sup>芝<sup>ツ</sup>月<sup>ツ</sup>と<sup>ツ</sup>の<sup>ツ</sup>原<sup>ツ</sup>と<sup>ツ</sup>ら<sup>ツ</sup>の<sup>ツ</sup>言<sup>ツ</sup>が<sup>ツ</sup>里<sup>ツ</sup> 藤  
葉<sup>ツ</sup>表<sup>ツ</sup>元<sup>ツ</sup>と<sup>ツ</sup>ら<sup>ツ</sup>の<sup>ツ</sup>入<sup>ツ</sup>り<sup>ツ</sup>口<sup>ツ</sup> 山  
豈<sup>ツ</sup>交<sup>ツ</sup>て<sup>ツ</sup>衣<sup>ツ</sup>の<sup>ツ</sup>破<sup>ツ</sup>れ<sup>ツ</sup>綴<sup>ツ</sup>り<sup>ツ</sup>あり<sup>ツ</sup> 葉  
秋<sup>ツ</sup>の<sup>ツ</sup>鳥<sup>ツ</sup>の<sup>ツ</sup>人<sup>ツ</sup>喰<sup>ツ</sup>より<sup>ツ</sup> 蕉  
た<sup>ツ</sup>く<sup>ツ</sup>ひ<sup>ツ</sup>の<sup>ツ</sup>型<sup>ツ</sup>を<sup>ツ</sup>た<sup>ツ</sup>濱<sup>ツ</sup>が<sup>ツ</sup>沈<sup>ツ</sup>て<sup>ツ</sup> 山  
雲<sup>ツ</sup>の<sup>ツ</sup>糸<sup>ツ</sup>よ<sup>ツ</sup>就<sup>ツ</sup>成<sup>ツ</sup>虫<sup>ツ</sup>續<sup>ツ</sup>く<sup>ツ</sup> 藤  
花<sup>ツ</sup>思<sup>ツ</sup>ら<sup>ツ</sup>る<sup>ツ</sup>石<sup>ツ</sup>の<sup>ツ</sup>扉<sup>ツ</sup>を<sup>ツ</sup>押<sup>ツ</sup>ひ<sup>ツ</sup>く<sup>ツ</sup> 葉  
貴<sup>ツ</sup>人<sup>ツ</sup>の<sup>ツ</sup>歌<sup>ツ</sup>お<sup>ツ</sup>ひ<sup>ツ</sup>う<sup>ツ</sup>け<sup>ツ</sup>ら<sup>ツ</sup>ふ<sup>ツ</sup> 山  
帆<sup>ツ</sup>夷<sup>ツ</sup>の<sup>ツ</sup>聲<sup>ツ</sup>お<sup>ツ</sup>ひ<sup>ツ</sup>た<sup>ツ</sup>際<sup>ツ</sup>と<sup>ツ</sup>舟<sup>ツ</sup>と<sup>ツ</sup>徒<sup>ツ</sup>て<sup>ツ</sup> 蕉  
生<sup>ツ</sup>海<sup>ツ</sup>嵐<sup>ツ</sup>子<sup>ツ</sup>と<sup>ツ</sup>も<sup>ツ</sup>袖<sup>ツ</sup>ハ<sup>ツ</sup>濡<sup>ツ</sup>ら<sup>ツ</sup>く<sup>ツ</sup> 藤

木の若<sup>ツ</sup>ら<sup>ツ</sup>う<sup>ツ</sup>西<sup>ツ</sup>小<sup>ツ</sup>所<sup>ツ</sup>堂<sup>ツ</sup>の<sup>ツ</sup>意<sup>ツ</sup> 山  
菽<sup>ツ</sup>又<sup>ツ</sup>高<sup>ツ</sup>屋<sup>ツ</sup>の<sup>ツ</sup>十<sup>ツ</sup>は<sup>ツ</sup>う<sup>ツ</sup>り<sup>ツ</sup>ん<sup>ツ</sup>也<sup>ツ</sup> 蕉  
ほ<sup>ツ</sup>つ<sup>ツ</sup>し<sup>ツ</sup>と<sup>ツ</sup>地<sup>ツ</sup>塚<sup>ツ</sup>ほ<sup>ツ</sup>く<sup>ツ</sup>ら<sup>ツ</sup>徒<sup>ツ</sup>人<sup>ツ</sup> 藤  
糸<sup>ツ</sup>よ<sup>ツ</sup>ら<sup>ツ</sup>る<sup>ツ</sup>一<sup>ツ</sup>痛<sup>ツ</sup>の<sup>ツ</sup>呪<sup>ツ</sup>咀<sup>ツ</sup> 葉  
不<sup>ツ</sup>二<sup>ツ</sup>の<sup>ツ</sup>根<sup>ツ</sup>と<sup>ツ</sup>並<sup>ツ</sup>ま<sup>ツ</sup>て<sup>ツ</sup>る<sup>ツ</sup>糸<sup>ツ</sup>ま<sup>ツ</sup>ら<sup>ツ</sup> 蕉  
藤<sup>ツ</sup>よ<sup>ツ</sup>り<sup>ツ</sup>雀<sup>ツ</sup>の<sup>ツ</sup>ひ<sup>ツ</sup>と<sup>ツ</sup>山<sup>ツ</sup>花<sup>ツ</sup>ら<sup>ツ</sup>ん<sup>ツ</sup> 山  
竹<sup>ツ</sup>くれ<sup>ツ</sup>又<sup>ツ</sup>鏡<sup>ツ</sup>成<sup>ツ</sup>志<sup>ツ</sup>の<sup>ツ</sup>ひ<sup>ツ</sup>う<sup>ツ</sup>ん<sup>ツ</sup>松<sup>ツ</sup>ハ<sup>ツ</sup> 葉  
衣<sup>ツ</sup>う<sup>ツ</sup>ほ<sup>ツ</sup>く<sup>ツ</sup>小<sup>ツ</sup>姓<sup>ツ</sup>萩<sup>ツ</sup>の<sup>ツ</sup>戸<sup>ツ</sup>を<sup>ツ</sup>押<sup>ツ</sup> 藤  
力<sup>ツ</sup>細<sup>ツ</sup>く<sup>ツ</sup>時<sup>ツ</sup>斗<sup>ツ</sup>の<sup>ツ</sup>簪<sup>ツ</sup>ハ<sup>ツ</sup>つ<sup>ツ</sup>か<sup>ツ</sup>り<sup>ツ</sup>て<sup>ツ</sup> 山  
握<sup>ツ</sup>い<sup>ツ</sup>そ<sup>ツ</sup>く<sup>ツ</sup>消<sup>ツ</sup>か<sup>ツ</sup>さ<sup>ツ</sup>の<sup>ツ</sup>意<sup>ツ</sup> 蕉  
破<sup>ツ</sup>れ<sup>ツ</sup>ら<sup>ツ</sup>る<sup>ツ</sup>具<sup>ツ</sup>足<sup>ツ</sup>松<sup>ツ</sup>園<sup>ツ</sup>ふ<sup>ツ</sup>ま<sup>ツ</sup>ら<sup>ツ</sup>る<sup>ツ</sup> 藤  
高<sup>ツ</sup>麗<sup>ツ</sup>の<sup>ツ</sup>縣<sup>ツ</sup>又<sup>ツ</sup>畑<sup>ツ</sup>地<sup>ツ</sup>り<sup>ツ</sup>て<sup>ツ</sup> 葉  
石<sup>ツ</sup>深<sup>ツ</sup>の<sup>ツ</sup>度<sup>ツ</sup>深<sup>ツ</sup>よ<sup>ツ</sup>ら<sup>ツ</sup>お<sup>ツ</sup>れ<sup>ツ</sup>香<sup>ツ</sup>と<sup>ツ</sup>強<sup>ツ</sup>り<sup>ツ</sup> 蕉  
ち<sup>ツ</sup>ひ<sup>ツ</sup>さ<sup>ツ</sup>さ<sup>ツ</sup>さ<sup>ツ</sup>の<sup>ツ</sup>水<sup>ツ</sup>と<sup>ツ</sup>月<sup>ツ</sup>れ<sup>ツ</sup>伽<sup>ツ</sup> 山

春の野の野花意様あひ来て 葉  
青州ちのちの藤の撮折 藤

熱田三歌仙

十二月九日一井亭

芭蕉

猿蓑より 有(少)乞の夕相取  
庭とくせへくはりの病雲 一井  
とやしくと見ぬあつ葉焼て 越人  
紙漉成えよ所幸有ころ 昌碧  
琴坊て庭の上ははらひり 荷兮  
障子ぬれはきゆる 灯 楚竹  
起させ下るゑるふはひ怖れ 東睡  
とこれ一筆の汗ぬらひる 蕉  
かけられしとらうはるたしとよ 井  
乳と飲るる子の我も何し 人  
麻布と様ひらけん織ぬて 碧

芭蕉

蘭と取こめいばとせかた  
夕立のせよすゆの雷の音竹  
馬もあつらぬ山陰の亭 野  
小雄麻のそれ灸袖ふれ付を 蕉  
花あつら後らひれかり人  
風よかりけて花の二ツ三ツ 兮  
島よけくく遊ハ遠かり 碧

病床

葉のひらいても花の枯れ

芭蕉

中あつら人のこれとさう

つくろひて

まきし雲とくひかをれ名たの

年くれぬとこそ子鞋とたふ

貞享二年

山家

後年そ齒原に篠のうらたひ

仔細ごとく

猿鳥古巢い梅のかりに

京良へあう急中

暮れもやうもふれ山の朝霧

二月堂未だ

あつちやうりの倍れ器のち

系よ出て清流の秋風

る壁に映る

梅白ーそのふや鶴とぬき

秋葉よるをとり牛ニツニツ 秋風

決て西存寺任口上人を

わつ衣又伏しの梳けさせ

大はへあう及

何といれれ竹やうけ 蓋軒

湖の眺る

草橋のねの花より 櫛

怪り小島の素門我を

やめてまのたの及つれ

〜〜ひまると

とととに植まらへんて

大願和尚の道化は

やめてそ角へあう

梅意ておのふれおむ

千鳥掛

和足亭

とるん

かき流しも我も多分の思ひあり  
 麦穂ふきとりうる月ひの末 和足  
 一ちして笠をう鳥ゆふられて 祠葉  
 久さよ袖ひれり名死に 叩端  
 佐ふれて方柄はふらう情ひ 葉言  
 ろうとはりの秋の風音 自笑  
 控こひて書ふ藤に耳を記 如風  
 念力岩ひこころふまゝ 安徳  
 通せ道の案に一喝示し置 重辰  
 長者の興よ背成ふけ山 兼  
 かき捨成るふ下敷のうつふ 足  
 厚よかるとふる八百の 警葉

兼

森透は柳花三つはつむらうあり  
 むねりふ秋の月さうしり 辰  
 それの秋をふるまぢの梅も 足  
 猶あはは猫舌喰れてり 風  
 多む丑控不鳥とる女死まで 葉  
 孫こめるをちが妻情を 言  
 燕よ短冊付て知らたり 知  
 龜さうつれを脊負ふさ波 蕉  
 天をさし勅よ夜してさふひ 信  
 五日の風のこや雨れさや 風  
 菓子賣も末これてはむ住とつ 笑  
 長尾のふらむたけを知らひ 足

熱田三歌仙

桐葉亭

竹とらやんらやうし董竹

とせ

のくまふて極やめる

叩端

田塚より妙の産のいかに

桐葉

云ふは高う以半の中通

蕉

力四のまの取相の不詰り

端

酒のむ漬のいうにほしき

葉

双六のうりみ又よとそし

蕉

琴の肌と一む袖つる香

端

野の宮れありしはまの転

葉

こころ持よとなる州紙をけ流

端

藝者をとこむる名月の冥

葉

面白の柱女の秋の取とるや

蕉

神風と一れく紅粉

端

共

川、池ゆく巻と角と結をて

葉

舎利とる流よ朝日うつろ

蕉

かこやうるふの赤<sup>こ</sup>の紙<sup>こ</sup>久し

端

羽織よ酒飲うる機

葉

ふりよめて女よ蚕おらうら

蕉

ゆらけ扇風の画よ洞く

端

すふき一笛のいろはを空り

葉

三股のふね深川の

蕉

菴住やひくり杜律と味は

端

花出たる竹ここの蕎麦

葉

いふ言く百舌をい吹矢と負あ

蕉

あ級む小僧袖いやかに

端

力明てお板い山を空たつらん

葉

そこの板益の流うめむ

蕉

印ノ雨のふく記於ち馬の背端  
ひふ山兔の尻冷ふ 音葉  
豈見やる人の膝にさうれ 蕉  
男やもめの老さうれ 葉  
風くくた文年の叔のせすく 端  
市門とたくく生狸の菱 養  
常樂山を祭る融る 葉  
夜よのころ連歌所の松 端

熱田三歌仙

桐葉

泣くしと櫻のむれの袖にちる  
ひとく 茶枝摘む寂の一家 芭蕉  
白うけ山籠りの籠とわらふ 叩端  
清水ととく馬柄抄の力 閑水  
面ふと舟田ふ新賣る料の上 東隱

宥のとやけふ極子極極る 蕉  
鼻紙又都の連云と付て 蕉  
暮る大津に三井の産る 端  
雪が侘ふ漢の焼く袖とよ 山  
藤より危の四五百の空 葉  
松風の餐又何か香はくし 水  
佛を刻む西谷の 僧 藤  
鳥羽玉の髪とさう女差はきて 端  
急がえやふる朝鳥の力 蕉  
秋はふかしく味太お食ひり 葉  
白子のよきまわら音の海 山  
浪ととる鯨の骨小花柱て 藤  
陰月を於期のかつと伝道 端  
笠持てかまるとに返る度男 蕉

五重の塔のほとりうき 桂楯  
鶴鶴の尾と端の團に巻いて 端  
凡そなれおくくへの付死 葉  
葉とりて抄の度ふと引接り 端  
田舎ありの物見こもたる 藤  
うちうめく前窓の查あつはく 楯  
たられて君と酒買より 蕉  
根の持又船ねよる歩て 葉  
おほん屏糸の時成と人 山  
鞭粗のひくくの吉れ為妻く 藤  
様子の粟の竹成よくそ 端  
陣つてまこと洗掃の秋れを 蕉  
まなうはくまの尾乃冬 山  
あこれふるま物焼て師の野に 藤

入日の跡れ星ニッ三ッ葉  
宮守り油とけつもくかの奥 蕉  
はく一のゆをゆきと西行 楯

田舎

牡丹葉ふくちあき葉のあきか  
庵小うりて

まころいひすと氣成らつてん  
葉よ葉さるふ

秋をへて驚もふるもやとくはあ  
とて喰ひまてらへひこいふ  
と年のくれくまら

りてお人のおすもつて人老るれ  
貞享三年

古畑や葎つとゆく男と

初懐紙

日の暮れととふ産けのゆく

其角

初よりきき去年の相の實 文鱗

雪村ら柳えより梅とて 北風

酒の幌よりぬいの 月 夕齋

秋の山も春のうれも愛らな 若重

炭竈とぬてきれこころ 杉風

里しの麦はのゝあるら 仙化

我のうらみ雨おほひせよ 李下

朝すこれ之時とおひ通る 攀白

と仏より人信づくより 朱強

らとやしく連致の女はとすん 蚊足

船よせ来るむら松の声 千り

有明の梨子打鳥帽は恙なき 芭蕉

浮世の高か宴ぬく納め 執筆

惜まれ一肩の本槿のさるたふ 鱗

ぬ位女きりこころ 角

心ふみ乳とのむ様の声悲 齋

命を甲斐の糸も又よ 枳

法の去我より髪とてはと人 杉

ら川うりの記とつるよの戸 重

嘆目より車うそふるよれの陰 下

橋の小雨はとむるかけろ 化

残るをさる葉山よれ弥ら 弦

赤のうに解て様成とる分 白

敷ちり眠とがてつる朝ほけ 月



元たる眉尻からんさぬく 蕪  
けし嘆てふさげたえゆる若葉 枳  
葉さけの思ふ夫鹿切りよ入 齋  
かれとて下みけけら 狐 武 角  
あられが秋のくもる 傘 鱗  
石の通鞍ころの方ふきすき 白  
われ云代の刀うけ 熊 沼 下  
永福の金乞くくねの風 化  
近江の田植英徳又斬人 弦  
とく起て宵指よ人何れん 重  
ねよ茶の湯の浦あはれ 角  
筑紫まて人の娘城めしつねて 下  
弥勤の堂まねもひあぬし 枳  
待春の鏡ハ塵たるまね中 蕪

女より人喰のあゝれれ声 化  
雨さへといやかりる鄙墨 齋  
門ハ奥丁と碓氷の寺 白  
狸不そにわうへ武志宮宅跡 重  
あゝあゝ牧の所を撥まよ 角  
鷲の一声夕日城月はたためて 鱗  
乳の銘屋秋さひれふて 下  
いふは子の本のる城死ね色 白  
はれたをいひくをねに流さく 枳  
ふあやとひく物あつたり 揚 水  
さうりいといひ金山のほら 弦  
比國の武仙狐名ある珍にせ 角  
京又汲る醒井の水 齋  
玉川やかのくく六のあゝと 蕪

江湖しよ年暮にりり 化  
外の花のこれ精シラケももるが 重  
井うこうせい雀うこよふ 水  
事むく葛屋の畑の表とて 不ト  
取と基紙抄屋のつぎく 鱗  
藤花の借ナの度系を打合せ 扱  
執又買るく秋のころの 蕉  
麻の音紙抱いんぬ人ゆつめ 殊  
小うた男の鬨とむ力ト  
名の雨たもと七里とぬらん 下  
停約に内の冬れ川つゝ 水  
み車糸つく音のわらゝとて 角  
梅はさうりの隈くくの 閑 千春  
二ナサキ方の道業人もとと免すや 齋

婦ちり川牛れおえに目れ 重  
胸あいに紙の縮と織シて 進  
れもひつゝくは落の刈に 扱  
羞のさふ紙まつりらみせて 鱗  
木魚ここある山陰に 下  
囚人紙やうて休むる物有 齋  
萩と一出寸長のほれあひト  
回一対とと未小名紙付て 春  
んふうら舞世ハ揮のわく 弦  
之交ふむよーおくはらう 化  
あるーハまろの草のぬれ 下  
傾城紙をこれぬたや 鱗  
径よみふらふちれうら 重  
井ふらふ筆おまか 白

梅ささく 薺小日ひありたり 齋  
 つつ雨よるの灯ふれ清えぬ 峽水  
 鮎とる夜の仲も静らに 化  
 浮城城家る方小報日の有る死  
 捧らりよて搗 造ら敷下  
 信長の治まる代やまゆらん 揚  
 居士と叫るくわく玉の児 鱗  
 紅は牡丹千里の香城かて 春  
 手をとむ谷よ出る温泉とす 峽  
 岩根ふく重地地を城居 角  
 わく一巾三子の若法地とも 齋  
 道ぬ急ういなり川小通言して 化  
 管弦城とすは音ハ位るく 重  
 足穿の庵山よ向る淋一とよ 揚

千声とあふるる 観音れ所名 角  
 船いくつ涼とあうりの川伝ひ 枳  
 尾長にすける松の志く 峽  
 麻むしられ七帯にちたる音白  
 連流らりたる表をひさし 白

一ッ橋  
 芭蕉

花咲て七日鶴入る 林麻く 於  
 懼て姓のよとる 細 搗 清風  
 足踏本城まきと氷る谷そ 舉白  
 茶を汁成えりる夏の戸 曾良  
 名方と隣に床たるそまら 二齋  
 枝えらうした桐の葉成り 其角  
 墨衣ふりいむの売居て 風  
 内外のト向志川ありたり 白

とておまけ付子の佳いつうーた良  
一夜のちさり後う流けうる蕉  
松明又教えんしうゝるの 陸角  
生て於るの水又流 るく 風  
教うとち知れぬ敵を世に教死 良  
ことりのの儀成かり入山寺 齋  
雪成えり山控やさつーはあまて 白  
虹のうーり日も白ひのき 角  
去つてい渡名成さるす方屋と 蕉  
三つり麻のつ 矢成有う入 齋  
勢くと軍にまある教うた 嵐雲  
男かうくの白狐とぬる 風  
篠琴の明の風狂成忘れさる 角  
ね〜こと〜く牡丹あつて 白

世

耳うとく妹う告うらむとき蕉  
はれかき又流に茶を成とる 良  
礼焼て刀はうりの傳へきり 風  
我う川齋と殿の中 拳角  
揃もとちお教やさしく詠をて 齋  
糸の力夜のう誦るらん 雪  
おとれくおやむ人のひのけに 白  
眉ぬく袖の翠を屋はらふき 蕉  
唐の書よめぬ不成うちやうて 良  
ひ〜りー買よ雪の山 通 齋  
あ〜れさい名をふ控ー破れ細 風  
竹や〜ぬくて塩やうぬ浦 蕉  
相國の極路ひ〜れと松 角  
軍成あつてまのやと〜ひ 白

山さくく瓦ふくもの生ふる  
古池や蛙をこひるの音

三日月日記

破風は小日教やよつろくをこみ

煮茶 蠅避烟 素堂

合歡 醒馬上 素堂

かさふる小田の水流をあり 素堂

月代見 金氣 素堂

露繁 漆玉 涎 素堂

張旭はおかきふる酔の中 素堂

瞳とた右にこくるしり外 素堂

掣帚 驅偷鼠 素堂

ふる死都は跡る街並を 蕉

くろくぬ首かきたる柵の接

乳とのひ捺は竹と夏を 蕉

舟 鐘 風早浦 堂

鐘 絶 日高川 蕉

教くろく早苗の混はよとて 蕉

食ハすけぬぬき大の教

詫教 三社本 堂

顔使 五車墳 蕉

花月 木山開 蕉

條成ははく老のうらひ寸 蕉

剪銀 鮎一寸 堂

箕面の傍やふと無らん 蕉

乾月うけ顔の紅をわやし

風殮喉早乾

よつれつる黍のまふりゆく秋きて  
内ハ火くほとを危の夕ノ力

霧籬顔執與 堂

靈浦目潜馬 堂

路く人忘てそおふ似るも声

こころぬ振の珠投と服に 堂

山伏山平地 堂

門番門小夫 堂

鶴鶴窺水鉢 堂

ちねよらりりてぬるをやけ

真ふつに初敷のまゑに花とを 堂

臨谷伴蛙僊 堂

元禄中終

其袋

夕照

情冷の望成りゆる西日ぬ 活荷

潮落うしふ芦の穂れく 芭蕉

雪の外の種とるくぬ松とを 露沾

幣よここすりる石の 露荷

入存のふに化粧なる武者ひり 蕉

梨の眞又筆とあやとる 露

山寺の屋も狐のさゆくと 荷

花散来巾と酒造るしし 蕉

ゆふ平段日くぬをぬ鞠の音 露

白た胡蝶の垣と花散す 荷

結強成探の抱よこらうひて 蕉

乱ま一繁成直とかなはし 露

潤へかた記念のほろ音も出  
竹も焼火よみれ盡し〜  
捧の力一ツの裏に信じて  
露 蕉 荷  
みいほくのおのうらやめむ  
四十雀とて凡も身ふ〜  
嵐

藤島山の力よ〜  
らる雨〜  
根からお若る人〜  
狐若〜  
ら〜  
似〜  
寺と縁て〜  
筑の〜

力とやし本す〜  
雨よ〜  
雪折〜

舟中〜  
舟のや廿七夜も三日れ月  
海川八多の中

茶買〜  
茶買〜  
茶買〜  
茶買〜  
茶買〜

夏〜  
風〜  
雪〜

陸やうのすくふはつうけの針  
うゝこれの舞をたさく極はつれ

老唄

牡蛎よりも海苔の老唄うもせて  
ふるた目も驚いたぬやうなれ  
京中やものこもつたは鳴きを雀

物咄自得

花よ花よ花ふらうひをな雀  
花のそと後い上りこのは軒の

夏角の母五七日

卯の花も母あさ君とすまきし  
夏にまた母もつすう郭と

其角

荒とさくはくされて

秋の月を下子のささあはれ

名月や池をめぐりておもす

句別

時秋の月の瓜こり旅のつと

露沾

原をこそぬえ風やらの力

芭蕉

山陰より刈田の秋のふさひて

沾蓬

武者追はれり一早川の水

其角

暮るくはそにほりくは接露

露荷

あふさぬ窓に枝取くお

沾荷

傘の陰状去くから傾げ

芭蕉

あふりむく一神山の民

露荷

暑き日れ汗が悲むは露

沾荷

まて一戸の蕨りたる

沾蓬



りそは五天のむうし法もぬく 其角  
藝ある傍に種撞せす 露荷  
意をひつ鎌倉山麓奥深し 露沾  
志何ら法をよめし風景 芭蕉  
右清くうき洗くことの様 沾蓬  
若城流うして難調しなり 其雨  
花受て人しくまの草の香 露荷  
額板ひう入山吹の指 沾荷  
伝流法やたらあめ春さそて 露沾  
磬うけうたにる帰る道 沾徳  
楯の影に我文集と書終り 芭蕉  
弟よゆると書れさうへき 露荷  
あうけいさのひ母記は右略て 沾荷  
琴城守さる 扱の 葉 沾蓬

文

馬城下りて野後やう林おあ 沾荷  
九義指とた尾上とるけは 露沾  
風の音なくぬ藻狭のう返く 沾蓬  
大に忘たる意の雪 扱 芭蕉  
きりもれく魁の孫らふまきひ 露沾  
ひくう簾か編くしに書 沾荷  
一軸の形えの連歌録よき 露荷  
名がぬぬこき紙の裁ひ 露沾  
面うけを後よむうへ男つよ 沾蓬  
みくしぬの目らあし振る声 沾荷  
難澁る花のふしんこのまじりて 芭蕉  
柳一のめれとここのしるも 筆  
句性別  
わすさくしんろようん番めり

濁子

薩摩のまぶらぐらうる月 芭蕉  
貝ひろひくりの破ふきて 嵐雪  
酔ふこゝ人の肩にとうつく 其翁  
々々の笑れいて取りもや忍ぶ哉 蕉  
根松苗放輝のたぐくも子  
依の抱きしにほめぬ極中かて 角  
これと入帆のえちるを恨紙 雪  
世の中が晝よの、れがう茶の調子  
殊うかりらの産穠を片した 蕉  
死念こゝ入命のちのころくも 雪  
まゝ紙占ごとく、国のかげ風子  
津の雲のまに、いしとお賞て 蕉  
二夜とすうの流るゝ侍 雪  
一老の連歌なとむひらに 子

苗代ともゆる雨の滴々きり 雪  
夢の粟のいこつたたてを遠て 蕉  
你買下り、いさかきぬ月 子

句例別

芭蕉

さうらねい、蛤とりせ雲夜の鐘  
一羽とらふ、千とら一舞 とも  
枯るまふよふく、おのふりこ 曾良  
田中の道の通うくれり、夜々  
存細く己る夜、こゝれと馬 狂行  
秋風わらう門のはし、水車  
露の糸線とこほと松の音 風泉  
あふい、いせし、まのきせ糸 夕美  
猿まら、女あ、の境にこ 苔翠  
秋風、けい、か、いん、の、筆

夕陽

時也 山隈 夕陽 暮色

李白

夕陽の葉は 薄紅は 夕人 色

松風よそ 夕人 影 夕人 色

朝ま 夕人 温泉の 夕人 色

待 夕人 夕人 夕人 色

高の 夕人 夕人 夕人 色

夕人 夕人 夕人 夕人 色

夕人 夕人 夕人 夕人 色

夕人 夕人 夕人 夕人 色

夕人

夕人 夕人 夕人 夕人 色

續虚栗

十月十日 夕人 會

李白

夕人 夕人 夕人 夕人 色

夕人 夕人 夕人 夕人 色

夕人 夕人 夕人 夕人 色

夕人 夕人 夕人 夕人 色

夕人 夕人 夕人 夕人 色

夕人 夕人 夕人 夕人 色

夕人 夕人 夕人 夕人 色

夕人 夕人 夕人 夕人 色

夕人 夕人 夕人 夕人 色

夕人 夕人 夕人 夕人 色

夕人 夕人 夕人 夕人 色

舞はる袖はくろく早瀬川之  
岸一面よのころ橋 抗 雨  
及まろぬ里にきぬ孤舟の風  
舟よやふらう人間流の麓人 鱗  
鳥の影とく白ひも影をうぐ 化  
おもしぬこと孤流の傀 俣 峰  
途中小たてる車は後城巻て 麓  
沖こく船に走されし 誰 之  
花もよよ名のはく浪を踏む 雪  
あつふく舟はうたの琴の白  
須の岸志とくうたの舟に水  
萱のぬけぬれ雪が焼 家 化  
老け文の繩もふねは野をうぐ 之  
名 流とれしあとの冥空 麓

五

竹の千流の松かきへつ 白  
今松たもへ船よ遠く 鱗 岸  
起出ても水はく人海のくさ 雲  
初くぬ舟寺成たのひる 舟 水  
舞やるふむ板の目ねし 舟 峰  
小畑といしと素子伴人 風  
まの戸の馬が酒債にえられ 麓  
はのふる星が妹にやうり 白  
葉のまわり面白くみ 化  
織らさして氏の天王 角  
舟牧野の笛吹ふらう童声 峰  
傍くろく腰にたれ 風  
りかきしとえまけ子昂を時て 角  
標のししは蜀瓜あし 雪

限もあやふ居定れ交かん 水  
筏も出て海若すらんこ給 雀  
谷深き日くは花の本目定 白  
声もあれたらうれいも 之

三河吉田歌

あを焚てふ拭あつるまゝ

あを拭

あを拭本原業言事書  
あを拭井後まの君あけへ  
あを拭たやうたうた

あを拭ていゆの中空や雲  
あを拭まろくは海の内 業言  
水輪ふりとたぢは舞ひうて 知足  
酒気さむれいづれ風の風 如丸  
引捨し琵琶の囊と打拂 安倍  
僕にあくれて年いそくなり 自笑  
あを拭こらる哺の鳥鳴は 重辰  
明日の命の飯りう 立信  
わたりあねもあはれは 笑  
種いふふくは 雀  
あを拭あはれは 足  
あを拭あはれは 言  
あを拭あはれは 燕  
あを拭あはれは 風

物差れおよむことたはむる  
揚枝とこやうふの力ありそひ  
小袖して風の風をもやうと  
ころふく揺の子紙捨てり  
うんた年紙うてせもやう  
父のいくさと起やうの夏  
松陰よとこーそつ波の声  
翅とぬるう鶏一はりひ  
まつりふる飛の羽とたて  
三交ほーたつ靴のかつし  
山ちる車よ削る木ぬるひ  
強ふらして思ぬあうく  
流汗流る行ぬ法の朝嵐  
狐うくうあき草草印  
信 足 蕙 笑 風 笑

殿やれて力いむりしれぬ  
むっむぬるところしうの  
ふれあらし指のまうぬける  
陳のりうをよ参ぬつる  
ふ文によととりぬせるぬれ  
手ぬたをけかんぬる  
くれ盛り文紙あつらふ  
脚燈うくう神燈の梅華

ふき掛

家後の子供はなれとも  
まじり言のうらむ

星崎の雲ねむりや鳴る樹

船とくのよる雲の惟火 安信  
假山のふくれは梅と極ういて 自笑

ほどく入子 催花まにまは、 知足  
 誓のうまおとまらたねおのし 業言  
 冢のこれこの世也 春死風 如風  
 一里のそら母かた川上よ 重辰  
 廻るこめて門をいひこる言  
 市よ出てさけいんがけえうれ 足  
 牛よれりみてきこさきこ 信  
 教白のよますれり我いひさ 風  
 方城はーたう探貝のほ 蕪  
 たり細よ甲かうけて秋の風 笑  
 わくろ紅まろ宇治の捨守 風  
 産能る西刈谷のあまれとく 足  
 冢本をたたく杉の古枝 信  
 笑る元よ産餉の時成忘れり 辰

甲山

山も産とまてのたけし 足  
 車探うらの真ふくるる産水 風  
 蕭ある眉取化粧もるる 蕪  
 かつらまのふと冷くく産の産 言  
 産られぬまよ松あけけい 風  
 罪みくて配およまひまくさまん 信  
 鹿子に儀ー水のついで 相 足  
 式日の日のわとぬこてんせく 風  
 後系采のまの川、 辰  
 探下は願ふらあろく産まふ 蕪  
 産探あ入り産火の産 笑  
 ころ月よ外里れ産のり通 足  
 すし産のやまひく産産ひく 蕪  
 朝産つさき産の産あし 辰

あはれぬかちらぬめしうたしと  
氏人の店園多記宗法より  
俳興養むれの名とくさしん  
田とくことあさうたのなと回と  
これとの外は種さかすん  
俳

雪の花

熱田の社所院庭ありたれ

芭蕉

麩並き種も清し雪の花  
るしく庭のさむきありたふ  
ゆしぬ松並き庭も風やきて  
我種帰る心のけりひ  
秋なれて内ふき墨れ一っ家  
枝は庭ひし庭さひのめし  
机をくちぬ法と縁にけり  
芭蕉

こぼろく鬢の思を別方  
ゆきゆく種ぬをひぬあし  
破きし玉の境ちる庭  
右畑はひし生たるまうて  
あし声や種ころころん  
松ゆは飯香ひり林の風  
まもりしやう表きる力  
熱中芽れさめこそすあ  
温泉のうたて人もさきり  
け塚の女のむの名にたれ  
たり泣顔紙笑るはくし  
朝露にくまれて倦る種は声  
ゆうく下る坂れふかけ  
氷溜る里の行景よひて  
芭蕉



あししふまつむ刺のみ除葉  
しり実歳なごけて記出り葉  
物衣はぬくふまごころんれ葉  
野そよて経積私をさるかと葉  
夕顔を岩のうられあしうれ葉  
おちうむねふし似る遠きて葉  
縣の賀のまう目なる有葉  
あさ山の伏猪城若る声しよ葉  
道一とち城州ふる萱葉  
優婆塞の市廟つむる文讀て葉  
後人記を授いぬにきり葉  
煎茶にぬれ茶いぬす雨の音葉  
水桶のゆる福半くこた葉  
西行の詩よあしぬるされて葉

夏の袂は皺うりかり葉

作良吉崎の南の海の葉として巻  
のけりうこそなるふとふつ

春のつらけてふねしらす

杜玉の巻として

されにうられよふしおの宿

鉄子

はららの氷ふもころみころれ 杜玉

千鳥樹

いらしと身よりうらむか  
接のあしれをまき

焼飯やいらこの言にほれん 紅足

みさむりし我足の 海 玉衣

ねとぬくかよ思ふ子よして 遊人

いほり鳥帽子の脱るる風 足



あしつ雲霞分て故郷の山雲し 英  
散てる鶯の啼こる見ゆ 薫  
ふた度ひ藤袴よ冬は寒城をて 信  
膝けし家の軒よとる力 辰  
秋やむしこつにわたる客も 足  
まじしまろくさきのつゆ 風  
あれこころ表もてむらむら 信  
瘦そつてるのまふつかりる 辰  
采うりよまねか出る朝すそ 燕  
山のよきひをほむ葉つと 信  
我急い岩城屋とつるつ松 風  
うさ名とせむるさう波の音 笑  
うさのこと山の橋の流ふしに 足  
琵琶よあられ成世の教のこゑ 言

天

色白れ有髪の僕のところもきて 獲  
夢に似たる雲多くみあけ 辰  
抱川市代のけいせいのうねいし 言  
けいせいよりなる侍者の浪井 燕  
貝けいしより力けいけい 辰  
経屋よやーあみ亀のやう虫 信  
旬くそ体は挫たる葉うりて 燕  
母のいのちをれやふく川 辰  
羊弓その壺のあさけらし 英  
外山の花枝やこころはよさく 足  
日ハ永く雨のふくたは雲をて 信  
厂の名跡をよひくたのく 言

昨を十日毎名古居りてなり

いらんしや

旅探してこゝやなせれど端

杖堂板のうらみあり

歩行のうらみはつと板を馬車

ぬるまや糸の弦のうらみ年出暮

貞享五年 元福改元

二日暮のうらみ

一日もぬらふ、せしめ花のま

風麦亭二首

夏立てゆく九日の地ふくれ

おこくその心いーらば梅の香

山家よりふらふて山家のうら

ふたぐものあういゝあーなま

香は匂へうに平る雲の梅花

うらみやまゝ陽炎の一二寸

うらみのなまはなまはなま

あまた陽を高くしるけく

晴ぬきのうらみ

はまのうらみはなまはなま

うらみ

神垣はなまはなまはなま

神垣のうらみはなまはなま

うらみはなまはなまはなま

あまたのうらみはなまはなま

笑きたはなまはなまはなま

景清も花のうらみはなまはなま

純竹菴

花はなまはなまはなまはなま

後三日

は程瓜つた又礼りふりつた

ついでついでと突進し杜園

二ある我とめよ産みよあり

道の吹とあしんとついで

万葉丸と名のる青蓮の

のよれおまをれうらに

乾坤無任日行三人

下つてて振るきうと捨生

若神こく我もせうと捨生 万葉

丹波市

草川てふ有うるところやふちれ花

初微

夏の夜やと花人ゆつ堂の隅

夏結しく備もさうかう花の雨 万葉

無時

雲雀うりうりよとやとらふ時か

ト一歌

花はうらひの日の朝あけ

まじくくの花のうらあなぬか

昔清水

ま雨の木下ふつとよ一つと

西河内

本ろくと山吹ちるうの音

うらうら

花と花よあけり神の歌

高野

父母のまじりては花と花

いづ花にふさふさ 夏の陸 力

和歌浦

いまふれらうけうきそと追付さ  
ひとらぬいこりしるふらぬ衣こ  
より出て布こ賣と衣こへ 五

念良

催佛の日ふうやんはひ藤さか

眞磨

後月世世の夫とねふくや時を

は後とひるるわくはうそ

蝸牛角ふりうきよは次で明石

明石お泊

情はふやんこつれさまごま岩

明あ

五

五月雨ふかれぬものやせし様

ふみちやまよりさるとまて

ままにきくうーつうん

さき人の小袖もや土用なし

よのうへより川清るさそれ 素

長良川賀志氏水樓

いあさり月にゆいゆいゆい

橋知又よ出て

ねもーろくしてやして想と橋知  
彩のつゝ小冊とほきてささ  
声あゝハ船も鳴らんうみ舟  
何事のこととてふも似すと岩

秋の日

七月廿日竹葉軒奥切

芭蕉

棠棣よとほしくもはらけ4州の庭

菽の中うりてある青 持 長虹

秋の雨うり物よあつぎかけて 荷

方ふとと涙瓜よりる山あひ 一井

ひたるーと人のやいひとらさよ 越人

若木おとすうてを根ふたふり 胡及

木の葉ちる抜のこも神をた 氣羅

待待うぬる此の答ももの 蕉

遊是て鼓の鳴声よ眠られ寸 虹

これよねんや毒ふかろうへ 兮

あはけをまきくちぎれ冷しぬ 井

死てるもあまよとまふふり 人

乙菘のけしけれ出るおのち 及

主

羨然くむとを縁ぬ後ち 禪

火うろしてぬるとのこい付あろ 蕉

向きたれもとのえゆる興うた 井

雨乞にまふしし花のうらほひ 兮

井 結ろくろおの連とや 虹

日和さよふくぬおのかしと 兮

本馬虫して子もまにたり 及

とまきこつたつかけてかきま 彈

切籠おろりけ薄たうくれ 井

さゆりの香うさるる力乾 人

人一代の急成ころん 林 蕉

控しせいのこの恨も引むし 虹

きたかくたれと顔も洗はれ 人

懐く服着さうてまこと出る 及

下戸をふくむる雪のおの亭  
早々の梅を我々にたたり  
嫁せぬむをめし眉かである  
志のひきよまそうれは酒樽  
踏とやさせるおのきほ一人  
明やをたねを満とてさう後まで  
何れかひはくまをやら  
花より硯の蓋ふおぬ  
差くう出とくふのうたれ

はらしれのおんといれいん  
送るいつとまかうてい  
朝ふの酒かりさうぬ  
送るいつとまかうてい

又科の月二人よんれ  
撥や命かきむさうつ  
雪とれて折の目もさうれす

姨捨山

侍や姨ひとり泣月の友  
はらしれや之折の月を

善光寺

月うけや四門四宗もたつ  
十六夜もやうと又科の夜ふ  
女といするは海方れれを

曠野

徐川の歌

石のねも志つのにやまのむさ

越人



涙志ひからく世にの 月 芭蕉  
森とくつ浦後宮庭は曇りん  
理とくふれたる秋のう言人  
瓢箪の大きき五石はくく  
風は吹きてゆる市人  
ふよとも長安いこれ名利の地  
透の多きとく目くらほし人  
いとうしと師老のせに立出て  
ひとう世話やく寺の流し人  
け里ふちと玄蕃は名は侍へ  
足詰もつせぬ雨のつけほの人  
さぬくまはやくあやむ人  
風ひき流ふまのう流くし人  
手もつう足屋のぬ据もとくぬ人

ものいそくされみ路こり人  
力と花比良の高根とくし人  
雲蒼とくはるころのぬぬ人  
破も戸の打うち付るまは末  
えせの淋しき妻の挽割人  
家おくて服紗よつむす鏡人  
おれとくひ居る神子のあひ人  
人まうしてゆくと法府の匂ひ人  
初瀬よと就る堂のくく人  
月とくき波嵐のちるま中人  
恒穂のさくけをわい人  
おやふくにぬみ妹う夕あう人  
何のまの誰う洞はむ人  
行為れうそのをく消さる人

きぬともきく 舞は居眠 養  
秋の田城くせぬ事れ名引て 人  
さししなぐく文字同にまゐる 養  
いりりく瓦底の本業て居 人  
延まをる子の瘦てかひる死 養  
花のころ淡きまゝもらるる 人  
田ふりを倉ふて腥と口 養  
柱磨

苔翠亭

遊人

舟出ハ行燈塔さん 庭まわれ  
朝うりふは茶檣のひよん 苔翠  
け君と名なつて井れあ居て 養  
すの行うふのイロにおひよ 反古  
あうら声は雨もつほくき次 夕暮

まもれとのそく山のそよ刈 混片  
あくたく極のうけれ淋しそ 佐々  
女房もこれの田まきくは人  
算とあうくうとる恋れ友 占  
瘧おさえてあうた気 泣 養  
やうと止ぬ雪の戸めとて物さる 翠  
さし誇りたる曲舞の章 養  
秋風やまぬ持たぬの表より 人  
谷の底のけとらしは 居 依  
わしは後まで一羽折るう 養  
仲はぬえり敷盛の塚 并  
角人の改中に花の寄りて 菊  
酔ふて牛より居るまゝ 風 養

鹿島紀行

白雲よさらば鶴返にそらしや 杉風  
流るるたる稿と下はを根 越人  
月夜日流ちたふと 鶴孫して 芭蕉  
をよよまよとぬをむふまらり 苔翠  
やつらうとねてさし 死雲丹井 友五  
もつるるぬらう 帯たもぬる 夕菊  
御肉とて 志紀中と名といふれ 依々  
能くさく 河溪の海苔くり 泥芥  
たそそちの火ふおとさるまき言人  
瓦びさし 小櫛ぬる 月 風  
墨と何もふ人と引とりて 翠  
ろくへ 戻たる名 函の貝 五  
音のうふおの 浪子やうらん 依  
小蛇もれ出る 岩を 壺のいさぬり 風

五十六

後後の洒落ハ善備と人々を照人  
英一ハ子の 孫と 睡 こと 蕉  
里まを花の本陰ふさうふ 焼 五  
たはるる 蝶のあき 釜よ入 菊

鄙懐紙

左柳亭

芭蕉

とやうく 笑け九日も 近 春 蕉  
こころうたれた川 音 屏の 芭  
新 富 去 来 けら つつ け 常 五  
きくくくく くと 山の こと 形り 文鳥  
慟 吞の 癖よ 陸よ 坂め たるる 哉人  
ふ 不 お け け け け 文と ねい こと 如行  
足の 裏かて 眠り ぬら ぬら けり 荆口  
年 坂 間 まで して ふと 雨 振りの 此 筋

或人のまゝにんやぬら舞 木因  
けつり 雛は精をこする 残香  
とくくして交する此このうし出 曾良  
書物の内の虫こらひ 於 斜嶺  
宛果一核もけころ虫一を 押  
齒ぬけとふまの貝も吹れと 蕉  
力なきく既中けりてかふるく 鳥  
あうつたうなる夜のか 列口  
一捧またつらふ山花咲て 通  
佳とらひこむまゆ藤味増人  
萬室のさくはくはくはく 因  
村とつれすを夫と退ゆ 嶺  
新すくけ御の及のたせしる 筋  
二代上子の夢ハかうりたり 香

揚弓のユミするほとむしに 良  
鳥帽子のらぬ髪も落くし 行  
冬こともこのまゝての大雲よ 祈  
茶のたてやうも不母内ふる 鳥  
美しく負生れつくあうさよ 人  
尾と生へき青のきぬし 通  
府新又貝足とやら城透して 蕉  
萩とそたも山一採の 氣口  
何事も益哉仕音よてほか 筋  
追ふも連ふささく 茶宮 良  
丸腰又捨てきり 香  
もの奴しる母の尊とさ 因  
花の信通念屋の草まら 行  
梅山次このころはさう多 嶺

十の夜

木曾のやせもやうな宿らぬに后の力  
行秋やまひまきこふと布やえ  
所命はせのやうな宿五外  
いこくも雪えはこふ宿と  
まこもてまきこふ宿と

木曾の谷

芭蕉

生那うういふつふ出るなむと  
ほくけいふ月よ寒き葉の 疏 岱水  
代宿のかまふにまの力とを 蕉  
居風は桶の端をこまきり、  
酢の糟は捨てはけれりとい 水  
々ふもむ人こくく次相談、

芭蕉

親の時こまきり一送者村居も能 蕉  
居かぬしりする 蕉 水  
香著れからこまきり 蕉 水  
様ううあまたる白 蕉 水  
下さ衣成馬ふもまきり 蕉 水  
中宿の荒もまきり 蕉 水  
こまかまきりに清てる清く 芭蕉  
ほくねてまきり網のまきり 水  
他らまて村成まきり寺の酒 風  
くけておとれお強き癒癒 水  
初花の汐伝るまきり春はまきり 風  
伊賀路のくまきり山の裏まきり 水

芭蕉集

杉風

雪やちうちまきり下ふる 芭蕉

力の柄も氷る多ぬくし 芭蕉  
唐からし本かろし新にきりて 俗水  
秋まてよなる 獨蓋の 蠅 依々  
細しい布子伝てする言分 曾良  
扉にて捨る腰の 二丁 形 義  
島守よこし葉の乳と除くと 岱  
わらわらひまはらちの洞 野城  
白くくしれ指の寺の林まで 杉  
髪状切ても身を作りたり 岱  
焼うとる物足のはら押し 蕉  
貫ひよせしと茶に含ぬ水 良  
藪とくは縁よりれたつ霜柱 杉  
出家よ花瓜きり上る 坡  
お局のいくまきつたなり 野良 良

取り竹の湯のさめてけり 依  
こつたはきき揃うといふ 野  
堀の釣も木にくくいとめる 執業

登人よあつたおももろくはれ

元禄二年

元日小田毎の日はさきしはれ

伊達衣

と書

陽炎の我肩ふたつあまこれ  
水おろくふをりけり 曹良  
拙っ屋よ 獨活のあえ地漣えて 塔山  
身いりそのまは 腰掛 此節  
いさふいしはし名ふにゆり 良

くろみかくに お賣の秋蕉  
萩原ハ 露まぬれても面立  
山 柳あり 拂ふ 伏の 松明  
五月 ちうし 小袖の 綿も 振あき  
蕉 落たる 髪成と 死揃へ け  
良 急ぐれて ころも 介りも ぬじ  
山 けそく 書くる くの 優一 死  
蕉 盃成そ ころに 火燈と きて  
良 年あひ けり 目付つと むる  
蕉 色け ちうし 夏ハ ぶりと 吹はる  
嵐 相の とうたつ 具陰の 家  
山 旅車 ぬる びり 一ハ 月と 花  
良 浪ハ すす きの 不二と 動く  
蕉 客よ ひと 夕下 なく けい 船  
蕉

本

たま 遠ろく あちの むら ち  
良 城北の ちつ 雲暗る 養ぬ だて  
山 起て 火成 吹く 鐘つ けり 妻  
蕉 けり ちうし 迷ひ 子 ぬる 里  
良 月夜 山 へんて 情々 せい 麻 登る ちうし  
山 山風 ほと ちひ 一、 ちある 栗の けい  
良 黒木 ふと ころ 谷陰の 小屋  
北 観 たり 姫と 身と やはる せん 柳 登  
蕉 あし せの 百合 又 洞く けつ  
山 狼の 負と て ぬる ちうし 月  
嵐 水の ちうし 又 佛 他り て 山  
良 ちうし ちうし 飯坊の 温泉の 熱 ちうし  
蕉 たり 糸ア したる 国の ちうし 物  
良 何ゆ ちうし 人の 匠者と ちうし 下で  
蕉 蘭

膳も居れも朝の霞焼山  
一門のきんころものさめに  
イニワラシのさきまき  
孫成つてつる孫政の筋作

未来記

草庵に極さうしあり門々  
其角冠雪うり

とま

雨のよみ極とさうしや草折餅  
春よ訓し襟さるの児嵐  
野屋敷の火縄もゆるる協志  
其角  
山のあまきこれ種守あり  
蕉  
家下に月毛の弱のらうり  
雪  
風ひさうりにさきくの雲  
角  
傍輩に相撲のお身たつれ  
蕉  
帯はこもこは金れたしふ  
雪  
森とこ初集より南無意  
角

蕉

豆舟仕しりく育され東風  
蕉  
酒さす扶よおほそ記まき  
雪  
剥ちとつる人老の紅葉  
角  
員軍功者に引てゆりあり  
蕉  
ふらひひさるる雪のり  
雪  
見をいと故屋へ這今月の友  
角  
菴の雑ろと綴る小雄  
蕉  
一通り彼岸の花の咲ちうて  
雪  
月氷よりくる暖縁や太赤  
角  
あたらかよ綿もさせん弱法  
雪  
所医者やうかか流まう  
蕉  
寝狐浪よりしと返もし  
角  
提灯えある町のいこは  
雪  
女房うよふ屋の事と云やとて  
蕉



高田の萱花をむしりて  
夏まじり軍の孫とぬき  
たしふお風の石葛へま  
よのふれ牛よせりる市  
湖披雪路の田舎六天  
とみふりとねま月夜  
いほくとやうと晴のけら  
糊たちた四手お着のく  
とんどとのひる男足  
つまはは戸城もこなる  
みたらし吸んで井の門  
栄へよとままは地花の  
三人こらふまは月うし  
雪

葉ふ分四よ芥子人形やう  
松の口やうはる人おわ  
杉風うふ葉わう

草の戸もけううおと

松

松一まやう名にとあられ  
松しんやうけうけふ二  
千ふりて

りまやもる魚の眼い

日光山

あつていといとま  
柳とててくま  
郭とててくま

雪丸け

ふ原茶拾草

秣負く人と枝折のふれか

色葉

青如く夜をふれこほと推の紫

草餅

印しついに市のりやを瓜皮たて

曹良

町の中ゆい川ききの月

蕉

有りのふれに居れり夕涼

挑

秋草はく惟子いたそ

良

ものいハ扇子に虫かたて

蕉

ととれた髪のつれ糸合

廻輪

尋るに火狐燈付る家もほじ

良

盗人こもれ二十六の里

挑

松の根よ茂たあへて年とん

蕉

雪うきかて連発始る

挑

本主

藤名所の 藤煮くまうた小野の炭俵

俵くまうたにたらの 家良

あれたも煮ゆきにいと悲れ

挑

ちぬともこえん胸のこたよ

蕉

綿繭の時ゆく花の情うり

良

たのこ弱よふふ蝶の筆

挑

日傘さけ子も拵ふて言

挑

衣成とてかす世中

挑

酒のり谷の拵木も佛之

蕉

拵人うへる祖の松

明良

片岸者の羽豆のを同

挑

本林のこまにふふの行

挑

月中の鏡つらぬふたり

里

一釜の茶紙こもり終るぬ

良

乞食ともしつゝて浮世の物産  
桐洞の地を越よこもるあり  
唯排  
まののまふ猿の洞を深つらん  
いこまごまご流人まふ  
流人葉前る秋風れ青里  
らふもすくく朝日ぬおむる  
蕉  
まのれちうに流の白浪  
二才  
衆の存れまふとて翻り  
良  
真の風雅ぬおまふつく  
場  
玲々しれり所死花小田置て  
秋  
存生るれつるまの海月  
也

まき屋ちのまき井原お尚の  
山居のたふり空模の五人  
からぬまのまふまふ

やー雨なうりせいとき  
えなまひーまふあれい

木塚も菴にやうらふまふ  
ころのまふまふ  
空城摸まふまふ  
まふまふ

田一ぬうまてまふまふ  
白川算

卯花ぬまてまふまふ

袋巻紙

志流相良侍たま亭

風流の何れやれれ田越

そなたをば打て我まけけ

巴

等

水で死て音藤の石や流らん 曾良  
落よ 蘇ソウカの声 出イとあり 蕉  
一 葉して月小 登れ 又川柳 窮  
思オモ惟よ 屋根ふく 村と秋あり 良  
船の女う上 弦念仏に 茶を汲て 蕉  
世はたのーやとこととむあ花 窮  
或時 憚ハヤシも 夏の入り 好らん 良  
撞ツキの小枝よ 志哉 陳てく 蕉  
うらとてい 娘の 娘の名はく 窮  
髪カミふるふ 山や白髪 ねむりけ 良  
酒壺の 車ひ送る ぼよよ来て 蕉  
秋とーする 方と我と けし 俗 窮  
まゝの 故の 盛つと 破る 藤の 青 良  
島シマの 所伽の 泣ふ せる 月 蕉

いろししののり び花に 露が 露  
かふーよ 舟に かく 糸 結 良  
ふも け 尾よ ねく 年やむ けん 蕉  
せり 捲く ころ 清水 冷く ね 窮  
葉い 雪舟一と ちけ 伝 有て 良  
たのー 武士の 名こり 宿 蕉  
茶とーぬ 物し 急の 世に 合 窮  
宮よ 石とーう ね 名 能りし 良  
よ 捲よ 細れ 腕とこー入て 蕉  
何やう 車クルマの たらぬ 七夕 窮  
任うーる 宿れ ころ け 力 故 良  
そく ね ありらむ 六条 髪 蕉  
切志を ぬ 枝うら け け 接 窮  
太山 けく 入の 声と 志と 良

跡しとや現きつともまきくみはよ 蕉  
殺生るの下はしるるあり 窮  
それきたるにたけり 孤道守て 良  
酒のゆふひの醒るころ 風 蕉  
六十の後こそ人の睦月か 几 窮  
蚕飼とる家小 小油重なる 良

伊達夜

きよ門可伸い栗のふうけに居候  
むまてつ栗くらふふまの西の本  
こまて西方浄土の候とて行基  
菩薩の一生たす様は御用ひ  
あつころや

かくれきりや目たぬ花は影の栗  
ふれよほころけとぬる夏州 栗齋  
切り明と山の井のふい有されて 等窮  
群信ひとるんれ 柳 操 曾良

イニ昔をの秋のうらさか  
あつころや久れ羽のあひれをて 去蘭  
秋去つころの後の屋くれをて 須守  
多くねたらま栄に有れ暮りて 等栗  
お歯黒よ吹よけけひひれ言 齋  
酒の遠根ひひころおし 窮  
聳入の准よまてしころつーん 良  
されて送まら 傾極のふ 雲  
を負と孤神ようしむら 結よ 守  
力のひつとひんころころる 圃  
招いては魚釣かおしき 淵さ 窮  
差の煙はすり声れくし 枯 齋  
梅ももて初瀬やまおはむの時 養  
かとらる谷の狐鼓まきりし 良

ある不しにまぬきしころを声  
あむらふそれぬ思登とく紀 窮  
ゆと難ぬつころ年のもし丸 竿  
かくし琴の膝やれもなき 養  
うた、膝の裏とくイナカた神をば 齋  
朴とかたる市の生 酔 窮  
行僧に三社の院城いふれて 良  
宗合休てし時こいつの後 蘭  
伽ふあり崎鴨の舟とまとい 窮  
四五日九坂えとら番のを 齋  
ち一付てりいふとばれ切ら 雲  
原の音 絶てあつせぬ村 良  
冠せりし海とこころりに後 養  
イニ文とてきくたふんまのりかう川こりりはくく文城まき 窮

急とれい世ふうこねふく人 蘭  
尋しせれせしーあく夜のた 齋  
入りは四門よ法のたれ山 良  
はこめぬこむる遊生の宿 雲

きのよけ里なるあま物るも

早苗とらふしとやむうしあふ 齋

依る庭より旧波のちも

源家の什お成拜す

釜もた刀し五月にこれ中 齋

釜も山のた能神へたあし

くてやうてん

釜も山にこころいひのぬらふ 齋

釜も山のた能神へたあし

翠白の雀ふはかりひいて

揺りゆく松ハ二本と三内こ

松之山

松ノ下や鶴の身松丸敷と

三鏡

五月雨のふりこのこや芝堂

庭花は葉を方より白毛のれ

庭花は葉を方より白毛のれ

尿管集

空風するの辰を花と

尾花は花風亭

庭出ふういやう下の暮のし

まゆぐれを侍りしてふの花

まゆぐれを侍りしてふの花

六八

春の初する人の右代のすうとこれ

まふち

宋とや思ふまゝ入殿の声

新名風流亭

あけぬか室たつぬる柳のれ

雪丸行

風流

所たつこの秋宿せよーやうれ樹

うりめてかごる風の葉もの

柔作り嫩な蔭と折えて

雪をかくは虹のしこと

さくらあふ方に二十里隔り

馬市暮れと弱ひくせん

燦々たる父の弓矢はうけ

葦

18

筆くろくろして判紙とこむる 流  
梅さうじ三寸も早じに唐瓶子 良  
こたも紙上けて通と 燕 加柳  
三枚とらんる夏よ遊々思ひて 木端  
侍の音こころも山の墓原 風  
雪さくぬきとたのれさくさく 柳  
蕨端さくさく端のほま 蕉  
のそく方紙焼の小社さく 松  
疾めくろんとさくさくさく 瑞  
さなる花の今に衣紙さくさく 蕉  
かけろよとさくさくさく 良  
たのさくさくと茶紙挽さくさく 流  
泉さくさく悪よからたさくさく 瑞  
油香炉さくさくさくさく 風

ほとんのか風不のさくさく 折  
志傍のいて小盃けりえんと 蕉  
武士さたれいる東西の門 良  
たのさくさく藤もさくさくさく 瑞  
お織よけいむ草紙の力 流  
秋文て抜き小さくさくさく 柳  
さくさくい海せり夏徳の谷汲 蕉  
さくさく紙を平紙たつぬさくさく 風  
所塚の裾よさくさくさく 瑞  
奉る供所のゆりれ雲味さく 蕉  
よこれてさくさく緑直の白紙 流  
ほりししこのゆりれさくさく 風  
さくさくさくさく雨のほまさく 柳  
咲くさくさく花のひさくさく 瑞



うらひとく<sup>いふ</sup>なりぬ<sup>いふ</sup>深<sup>いふ</sup>音<sup>いふ</sup>宿<sup>いふ</sup> 雪丸<sup>いふ</sup>け

大石田高野平の浄土亭

五月雨<sup>いふ</sup>哉<sup>いふ</sup>のつきて早し<sup>いふ</sup>室上川<sup>いふ</sup>  
岩<sup>いふ</sup>の<sup>いふ</sup>重<sup>いふ</sup>たつ<sup>いふ</sup>く<sup>いふ</sup>船<sup>いふ</sup> 杭<sup>いふ</sup> 一<sup>いふ</sup>栄<sup>いふ</sup>  
凡<sup>いふ</sup>畑<sup>いふ</sup>い<sup>いふ</sup>さ<sup>いふ</sup>ふ<sup>いふ</sup>そ<sup>いふ</sup>よ<sup>いふ</sup>新<sup>いふ</sup>き<sup>いふ</sup>ら<sup>いふ</sup>て<sup>いふ</sup> 雨<sup>いふ</sup>日<sup>いふ</sup>  
里<sup>いふ</sup>と<sup>いふ</sup>ひ<sup>いふ</sup>く<sup>いふ</sup>入<sup>いふ</sup>る<sup>いふ</sup>葉<sup>いふ</sup>の<sup>いふ</sup>細<sup>いふ</sup>道<sup>いふ</sup> 川<sup>いふ</sup>水<sup>いふ</sup>  
牛<sup>いふ</sup>の<sup>いふ</sup>子<sup>いふ</sup>に<sup>いふ</sup>こ<sup>いふ</sup>ろ<sup>いふ</sup>ふ<sup>いふ</sup>さ<sup>いふ</sup>さ<sup>いふ</sup>む<sup>いふ</sup>夕<sup>いふ</sup>方<sup>いふ</sup>音<sup>いふ</sup> 栄<sup>いふ</sup>  
雨<sup>いふ</sup>を<sup>いふ</sup>重<sup>いふ</sup>し<sup>いふ</sup>徳<sup>いふ</sup>の<sup>いふ</sup> 吟<sup>いふ</sup> 蕉<sup>いふ</sup>  
侘<sup>いふ</sup>多<sup>いふ</sup>成<sup>いふ</sup>ま<sup>いふ</sup>ら<sup>いふ</sup>う<sup>いふ</sup>に<sup>いふ</sup>あ<sup>いふ</sup>て<sup>いふ</sup>く<sup>いふ</sup>山<sup>いふ</sup>か<sup>いふ</sup>し<sup>いふ</sup> 水<sup>いふ</sup>  
お<sup>いふ</sup>ひ<sup>いふ</sup>と<sup>いふ</sup>ひ<sup>いふ</sup>か<sup>いふ</sup>く<sup>いふ</sup>圓<sup>いふ</sup>の<sup>いふ</sup>境<sup>いふ</sup> 目<sup>いふ</sup>良<sup>いふ</sup>  
永<sup>いふ</sup>樂<sup>いふ</sup>の<sup>いふ</sup>ふ<sup>いふ</sup>ろ<sup>いふ</sup>た<sup>いふ</sup>寺<sup>いふ</sup>に<sup>いふ</sup>成<sup>いふ</sup>哉<sup>いふ</sup>て<sup>いふ</sup> 蕉<sup>いふ</sup>  
夏<sup>いふ</sup>と<sup>いふ</sup>合<sup>いふ</sup>と<sup>いふ</sup>る<sup>いふ</sup>大<sup>いふ</sup>石<sup>いふ</sup>の<sup>いふ</sup>低<sup>いふ</sup> 栄<sup>いふ</sup>  
短<sup>いふ</sup>お<sup>いふ</sup>の<sup>いふ</sup>香<sup>いふ</sup>成<sup>いふ</sup>あ<sup>いふ</sup>う<sup>いふ</sup>つ<sup>いふ</sup>と<sup>いふ</sup>と<sup>いふ</sup>な<sup>いふ</sup>ら<sup>いふ</sup>る<sup>いふ</sup> 良<sup>いふ</sup>

凡<sup>いふ</sup>紅<sup>いふ</sup>う<sup>いふ</sup>つ<sup>いふ</sup>ろ<sup>いふ</sup>双<sup>いふ</sup>の<sup>いふ</sup>乙<sup>いふ</sup>水<sup>いふ</sup>  
捲<sup>いふ</sup>上<sup>いふ</sup>ろ<sup>いふ</sup>と<sup>いふ</sup>と<sup>いふ</sup>れ<sup>いふ</sup>は<sup>いふ</sup>見<sup>いふ</sup>の<sup>いふ</sup>さ<sup>いふ</sup>を<sup>いふ</sup> 栄<sup>いふ</sup>  
わ<sup>いふ</sup>つ<sup>いふ</sup>ふ<sup>いふ</sup>人<sup>いふ</sup>は<sup>いふ</sup>告<sup>いふ</sup>る<sup>いふ</sup>秋<sup>いふ</sup>風<sup>いふ</sup> 蕉<sup>いふ</sup>  
水<sup>いふ</sup>碧<sup>いふ</sup>ろ<sup>いふ</sup>井<sup>いふ</sup>の<sup>いふ</sup>力<sup>いふ</sup>を<sup>いふ</sup>と<sup>いふ</sup>も<sup>いふ</sup>も<sup>いふ</sup> 水<sup>いふ</sup>  
さ<sup>いふ</sup>か<sup>いふ</sup>く<sup>いふ</sup>折<sup>いふ</sup>と<sup>いふ</sup>と<sup>いふ</sup>ろ<sup>いふ</sup>と<sup>いふ</sup>と<sup>いふ</sup>も<sup>いふ</sup>さ<sup>いふ</sup>を<sup>いふ</sup> 良<sup>いふ</sup>  
花<sup>いふ</sup>の<sup>いふ</sup>後<sup>いふ</sup>は<sup>いふ</sup>成<sup>いふ</sup>哉<sup>いふ</sup>と<sup>いふ</sup>る<sup>いふ</sup>花<sup>いふ</sup>遊<sup>いふ</sup> 栄<sup>いふ</sup>  
緑<sup>いふ</sup>と<sup>いふ</sup>ん<sup>いふ</sup>い<sup>いふ</sup>と<sup>いふ</sup>ふ<sup>いふ</sup>ひ<sup>いふ</sup>山<sup>いふ</sup>陰<sup>いふ</sup>の<sup>いふ</sup>塔<sup>いふ</sup> 水<sup>いふ</sup>  
種<sup>いふ</sup>多<sup>いふ</sup>お<sup>いふ</sup>ひ<sup>いふ</sup>は<sup>いふ</sup>世<sup>いふ</sup>の<sup>いふ</sup>ま<sup>いふ</sup>を<sup>いふ</sup>も<sup>いふ</sup>て<sup>いふ</sup> 蕉<sup>いふ</sup>  
刀<sup>いふ</sup>う<sup>いふ</sup>ろ<sup>いふ</sup>と<sup>いふ</sup>る<sup>いふ</sup>甲<sup>いふ</sup>斐<sup>いふ</sup>の<sup>いふ</sup> 一<sup>いふ</sup>乳<sup>いふ</sup> 良<sup>いふ</sup>  
い<sup>いふ</sup>ら<sup>いふ</sup>く<sup>いふ</sup>垣<sup>いふ</sup>人<sup>いふ</sup>も<sup>いふ</sup>通<sup>いふ</sup>ら<sup>いふ</sup>ぬ<sup>いふ</sup>岸<sup>いふ</sup>の<sup>いふ</sup>水<sup>いふ</sup>  
ま<sup>いふ</sup>の<sup>いふ</sup>ま<sup>いふ</sup>た<sup>いふ</sup>ひ<sup>いふ</sup>は<sup>いふ</sup>前<sup>いふ</sup>を<sup>いふ</sup>松<sup>いふ</sup>れ<sup>いふ</sup>木<sup>いふ</sup> 栄<sup>いふ</sup>  
星<sup>いふ</sup>繁<sup>いふ</sup>る<sup>いふ</sup>愁<sup>いふ</sup>は<sup>いふ</sup>さ<sup>いふ</sup>ら<sup>いふ</sup>に<sup>いふ</sup>枯<sup>いふ</sup>る<sup>いふ</sup>ま<sup>いふ</sup>て<sup>いふ</sup> 良<sup>いふ</sup>  
集<sup>いふ</sup>る<sup>いふ</sup>遊<sup>いふ</sup>女<sup>いふ</sup>の<sup>いふ</sup>名<sup>いふ</sup>成<sup>いふ</sup>く<sup>いふ</sup>心<sup>いふ</sup>力<sup>いふ</sup> 蕉<sup>いふ</sup>  
兼<sup>いふ</sup>白<sup>いふ</sup>ふ<sup>いふ</sup>ら<sup>いふ</sup>う<sup>いふ</sup>て<sup>いふ</sup>ね<sup>いふ</sup>し<sup>いふ</sup>奎<sup>いふ</sup>足<sup>いふ</sup>踏<sup>いふ</sup> 栄<sup>いふ</sup>

柴賣よ出に家路もどろく  
 合款ツタ 本陰と意ひけらひ  
 たえく 鳴らに子目れ紅  
 古々の友りと赤瓜ふくく  
 去葉流とりの糸 合 栄  
 雪とれ源をけ市の名跡と  
 煉掃の日成ま居の 客 惹  
 ふれ人と古き懐紙ふくふれ  
 平はくとも月ハ越つて呉宛  
 山田の種とハくみちる雨  
 良 蕪 水 栄 惹 良

花摘

六月四日羽黒山本坊より  
ふいで興り

有るく書言公かどらん風の青  
 芭蕉

位いざなくんのむとく夏草 呂丸  
 川舟の徳よ童引きて 曹良  
 粉の花あしとよえあらし月花 釣聖  
 沓水よ玉もうくく村の音 珠妙  
 ことたも南も取うちり 梨水  
 ぬふくよの屋も陰よとま扱て 雲  
 百里の橋を依るの半退 尾  
 山流くけくろに塚の記と去ん 丸  
 芥持をくい神 本の森 良  
 云よこの江志とひい若殿と 雲  
 豆うとぬあいの何とれく鬼丸  
 右所所とちねかりく接は光 丸  
 糸よま枝まくく多くれ秋 水  
 力えよく引記とれく愧れ 良

焚めしうらむ羅あり、由 蕉  
中のころく大の如じに記ありて 丸  
的場のを傍よ笑る山吹雪  
春が経し七つのごれかる 蕉  
汲ていたく醒井の水 丸  
夏虫のこころごとく接り 蕉  
敵の門よ二枚の扉より入り 丸  
おと備る夏の世中の地をよと 丸  
妻をよもらう山犬の 声 蕉  
くは雪の楳のうれまのよきく 水  
温る水の香よ思はるう 蕉  
龍の音は持るふとつて 雪  
とてからしむるおとくは 入  
力の心ありの風と骨にむ 良

七三

鍛治う火おと指書のの 水  
あうらる相よんけしん 丸  
鳴子おとろく行殺の 蕉  
盗人よはまそふ味る 蕉  
いのりもつとぬまくの 良  
蕉のさうれ小流をよめ 蕉  
言希よ上る乙もの 水

とくしとやふの三日 蕉  
かうくれぬ湯屋にぬる 蕉  
陽屋山新ふむたの 蕉

初菰集

在園重行亭

あつしや山は出づの初かよ

世書

輝は車の音はなごる井戸 重行  
 指撥の暮いさかしく抜おこ 曹良  
 国跡生の末の二日 有 呂丸  
 我流よあつたつた採れ花 行  
 総坂坂蜂と付しつらよ 蕉  
 山の塔よこころそく帆舟紅 丸  
 蕨ふふまほいふとほら 良  
 栗得は日毎の無ふ食飽て 蕉  
 りけちりうは新るるれ戸 行  
 あつ採成母の記念ふ植をれ 良  
 雀よのこん小田の薊そめ 丸  
 は秋も門の板ろく最きう 行  
 救免よそんれて掲るる力 蕉

さぬしにおかふりし寺籠丸  
 者の女れぬよものつけ 良  
 階入の花えろ馬にうち強て 行  
 もとれ廓い畑よ焼けろ 丸  
 金銀のまよし一歩ふ改まり 蕉  
 素良の都よ豆腐初る 行  
 は雲よえろこまこを金揚て 良  
 藤巻ふうの化粧うろし 蕉  
 遙けさ目成泣持と流紫取 丸  
 まよしに女成くとせて 良  
 千日の菴成じとよ小ね魚 行  
 蝸牛の壳と踏はふれ青 丸  
 身い撥のらふうと最きと 蕉  
 こけてあけと女鳥ふら 行

あつりる力成り所のまににて  
温泉かそへる陸奥の秋田 蕉  
初7のけううたり入水の極丸  
山と他他る宮の昔へ入 良  
あま衣男にゆさうらこらよて 行  
けかふくたご歌のつご極丸  
花の咲鳴とやうらふゆきを 蕉  
登よくりりし言れ山ひこ 良  
あつりる

出羽酒田伊東不玉亭

芭蕉

あはみ山や吹浦うけてくまの  
海招らる破またくむ帆遠 不玉  
舟出ハ岸を改めらん酒とらて 曾良  
民の電のけらる秋 風 蕉

まろしき握おやうたる玉 玉  
あらしの玉成ふる入る義草 良  
冬忍他る難句の右に冬の時きて 蕉  
火成焚く新よ白髪雲々 王  
海通ハ及もふたせ切せとめ 良  
ねまねくる武隈の土産 蕉  
草花おうーれたるはあひて 玉  
ちよこの針よゆるあひと 良  
此供して高かこ我も思ふえ 蕉  
けせれまもえとー師ふ入 玉  
朝つとえまき常ちれ鏡の声 良  
くふも命と語のとこ 食 蕉  
かひくろ花一葉おと葉葉折て 玉  
ねほるれ鳥のこねふの 力 良

とれいに木魂こゝろの風蓋  
とくこの風ふたさうら山 昨玉  
劉力らけらふけきたる並傳ひ良  
権おふさむる塚の 青き玉  
とく家おのりぬる思と藤らん 養  
もほす衣ひ逢へくそま 良  
明日志ん雁公儀よ生屋と 玉  
力さく毒さ陳中の市 養  
中薬いさ鳥の奥にさく入 良  
小波権と返る戒の師玉  
志良の母ふ似たると家く良  
を大にいさくぬ家いられとも 良  
志良の京おつこたる古今集 玉  
花さ封切る坊の 酒 養 養

雪丸け  
雪丸け  
雪丸け

六月十五日寺嶋彦本専

とくしとや海よつたら上川 色養  
力公ゆりふ浪の深海堂 合道  
黒野のそばりく屋の窓のて 不王  
藤ハ両よからんさきされ 定連  
権とちれ折あばりて市公侍 曾良  
新よ満るさうさふれあつた 任曉  
不接蓮のこくらんせれ色衣 康風

糸はち雨より西流うらふの花  
は誠や鶴徑ぬもて海すけし  
糸はち料院はくふ神も  
海土うらぬやを板をまわこふ糸  
伏耳

ここの果試

波こそぬきうらまをてあふと葉  
曾良  
昔は海は佐渡の横たふこふの川

並江津

巻

又月や六日しつねの板ふらぬ  
やぶひのせたる桐の 一葉 左押  
報言よ飯焚くうらまをて  
曾良  
花のふゆのこせよる強  
眠鴉  
のこを啼むうらまをて  
此竹

生

松のるよはく供 陸 布囊  
夕つし庭はもらふるぬ葉 石  
たつひをを終りけり 水 筆  
おもひうけぬ 眞誠傳へる一  
粟  
とぬしの場は記もあつた 良  
救しこのうらみれ品の指つて 義  
養  
唯まうはる我うらみれ 魚  
唯  
唯引て来る大のふくさよ 雪  
鳴  
唯うつとまを知らぬ葉 衣  
鳴  
たつと武人のふゆの菴 粟  
粟  
花の冷其うらまをて星かまふ 年  
年  
蝶の羽をうらみ 蠟燭のうけ 雲  
雲  
春雨は髪刺る 髪のかまふ 蓋

香いろいろしに人ししの文良

日

右雲

星今宵昨は約率てとほに

と考てししき初州の稲曾良

瀑水涌まいそく布はとて 芭蕉

けら十と日か

持極て小枝よ花の名紙侍也

雨のしりりこの日ハ長宗あり良

糞紙密雪車もれしは雪の上 蕉

いざ鳥人ふきて 花 雲

金山右伴て小砂城拾うん 右

科のいししは臨陰の産也

うれたるの百首は奥の名とて 蕉

人いそつりしは年れそとれ 良

七七

おがーい唄てししりの音は雪

子成射させる松の床蕉

修け老の袂はぬしの現れ 右

性背の力山は同たし 也

核皮むく老のかしは秋を 蕉

時ふきてふれうつれ半熟を 雪

塩漬の孤村のくつろぎは 也

信あれふれは流しき 右

かよれし地元の縁よるて 曾

後成おろせる里の物 陰 雪

依備成まつて花のよきに 蕉

才木成よりぬく梅のひこ生 良

幾後の新雪の花文のよき



かとうのたに家一と

ひとつたまた女もあつた萩が

あはれに入るとき

己せのよやふ入志は有破海

一突う隊うし

様もうこけ我は身入秋の風

女紅菴

砂暑志くくよの斜札花子

芭蕉

くくくくくく秋の日の軌一泉

方よりも河井の末より次て左化

蓮花よりいへり村の生垣ノ松

嫩飯治の門城なくして摺竹意

小桶の清水びくくく明くれ悟子

美

さう生長せしも映れらん雲口

鳥放<sup>+</sup>やるに一の栗原乙州

詠み入るよ通あるらゆくと女柵

ともし消ゆをハ雲に出る方北枝

肌をよきまよとあつる浴か曾良

とのう之本は月一なる稲流志

二ツをいこくふ死中と縁組て泉

くくめやゆる圓の候目蕉

系うりて麻方小我路入衣枝

あーたふむむさきさのそら口

その戸の花ももうつら蛇老と浪生

細うりこもあつて幾ま良

あうししと月つれさくも秋風

卯の竿

歡生亭

長

ぬまてり人もたうし書はれ抜  
 驚うられますく死ふく家 享子  
 月又と痛も出と船上げて 曾良  
 下ぬこひひく成結めうこ 北枝  
 松の風屋麻のまれういさぬ 工蟾  
 塵ううへて馬の一ひれ 志格  
 日成徑うり湯本のまも出かろ 斧下  
 下戸まもとせてすは酒持 麴生  
 紫の古死一三鐘もちされたり 李島  
 互の地系又松ううとや 祝三  
 暖籠又鳥の声も了交り 夕市  
 七六

秋成とくむら穿雲の船獲  
 肌の衣女のこころのまら 格  
 ろぬをまらして我うつ 蛆  
 ようかろる本より出は聲 枝  
 雷あうか塔のふは月 良  
 ぞよまらぬれうらまは 子  
 胡家こころの神の胡うは 邑  
 扱もとらう虫ふい声れあふ 市  
 ひうを急く力れ市 陵ト  
 子あうかろる花又まはくは 生  
 離うる雙又通たつらり 三

燕歌仙

北枝

馬うりて燕ふひりふら

くふ状くくく山の曲りの曾良  
力よりと角力小猿鳴ぬて 芭蕉  
鞘くくくくとやくくくり 枝  
青閑と猿のふくむ水の音 良  
柴刈こくくく草の並道 蕉  
雲ふくくくく心のふくくく寺 枝  
於女に五人田舎くくくく 良  
落かまゝ思くくくくくく 蕉  
髪ハ判らぬと魚喰ぬく 枝  
蓮の糸くくくく中し罪浄く 良  
先祖の負儀はくくくたる門 蕉  
有力のくくくく上座くくく 枝  
あまのくくくくくく桶の弓竹 良  
あまの風ハものくくくくくく 蕉

全

志ろくくくくのくくく葬れ 枝  
花の香くくくく都の町遠く 良  
まゝ儀のくくくくく仍の 柳 蕉  
長床さやまから新波の 柳 枝  
根の小鍋を出て芥や丸 良  
ままらくくくくくくのはくくく 蕉  
笑くくくくくくくくくく 柳 枝  
法と小社意あまのくくく 蕉  
那花人ふる人のくくく 柳 枝  
略くくくくくくくくくく 柳 枝  
あはれくくくくくくくく 柳 枝  
初め人草れ花くくくく 蕉  
小くくくくくくくくく 柳 枝  
宛瘡のまゝ名日くくくく 柳 枝

ふこれ 黒しり 枇杷 つらるこ  
ほろ長ふ 仙女の姿たごらに 兼  
あゝぬを 一なる水の白波  
仲間 けう治のけうろとお海ふ 技  
寺よ 後さたけい 口上  
種つとて 終いん花もよめり 兼  
融抱人と やしひ言り 兼  
菽の松  
一泓り 又うろる 菽の松 兼  
むしのつひまを 故落縁の下 菊々  
紙子も びうと けうろ 白之  
けうろ したをむせぬ 後け 残夜  
極末 極末 朝花かくれん 芭蕉  
食のさう ちあ事ハおほえ 曾良

略通

全

肌ぬさて 人ふとせさう 夕同れ夕  
兜さく けう守時のたり 兼  
たきあのけうろに 條 破響 兼  
けうれ 夢しと 扱菜 兼  
兼よ 花もをく 鳴よ 兼  
けうえ せり 兼の 兼  
さうろし の貝拾へる 布ふら 兼  
地獄 繪 兼さく 扱の 兼  
さあし した 虎目に 兼  
兼ら 恒根 兼ふふ 兼  
豆腐 いく 兼さく 兼  
兼の 兼さく 兼  
兼ら 兼さく 兼  
あし した 兼さく 兼

管まらう船に乘つむおれしは夜  
けらう空に身成きちるもなる通  
みまてたのむたよりおれ之疎  
振うしたひにおかひまぬる之  
言さし無野あふの世しと夜  
系もつらう人よ絶す通  
田と穿くふてゆひしふもか絶業の  
大吼うする森の入り口夕  
ゆふた秋夜風うしろに死張て良  
そろしし空を秋の炭やれ夜  
谷哉又新酒香とよころかり夕  
らやて堂のころに棟上々通  
らうむれて夜病送るおれけ之  
まもかけして一むとれはうし兼

春をよみて近うらむとれは  
胡蝶くくく 花の 新華

春の舟社うて美堂の甲  
後世にこれ又て

むらんやれ甲のふれさうしす

山中温泉

山中やうゑいそそぬ漫の白ひ

春の舟社うて美堂の甲

松のまけそそ葉ちしふふ秋の風

春の舟社うて美堂の甲

今日よりや生れ消人をもの春

ゆきしてたふれおも秋の系 書長

金昌寺

名を捨てたふれや寺はあやねま

よすかしの秋風さくさく丹山 音

おぼろの扇じさく余波うれ

幸水社

有清のぬれのもてるぬのと

名月や山は日暮空あやう

後山

月いつと鐘いしつる海の底

如水亭

鏡石て木のこ草はと捨と命

本因亭

かくたおや方さ案とに田と反

如行亭

やせまつしきんれまふ案つる

千鳥掛

糸とつ才の就宅成す

うさやや雀うさくふ存たの栗

蘇よえりる丹さ菜 萱 香

なげはを堰の編橋さかて 安信

風は煙より力のけけほの 養

杖垣のたあふいととれ鳩声 足

とみさお下りて紙子打つく 倍

いせの庭をあんとして

蛤の二見よつれゆく秋と

そらさくれおあひぬ所はま

長尾時

初時雨梅も小夏の萩にけし

多胡碑集

つこ子もけしつらうん玉雲

芭蕉

お花よまをまはにりた水仙 良品  
羽帯の風やむね又軸もたて 指風  
唇をむひらくむ月の換途 之園  
麻の声し兼のかりよれ衣る 古茅  
さうく流る雪子のもとん栗 半襪  
鶏のあふふまゑよおされ品  
その食うちの蝶のうらるる 蕉  
左ねうら履斗府 佐々盛うま 園  
はりれるまをけよるのみ 松 風  
多く浪志のひししはみみて 残

全

梅もさうくことや列まきり 若  
馬の音傍ままのとりし 小 蕉  
か入るるふふふふふふふ 風  
秋うせの夕屋ふるふふふふ 品  
舞ふふふふふふふふふ 園  
庭しをれいふにぬる花の置 芳  
飛織とろくまの糸文 蕉  
漱きて耕を肩とらやとめ 風  
首の元たり頼朝の 雀 幾  
お空よまふふふふふふ 蕉  
まふふふふふふふふ 品  
昔は 雪の年暮安ふはこれ 園  
林とつれふふふふふ 風  
痛るおも訓まの安に流け音 芳

風雅仕上り流のこれま子  
世の中へ機屋界なる蓑衣品  
！記るるれへ俳切たこ  
猫撲焼ハ月夜船しこく風  
僧の盤判る盆の夕暮る  
ふふふふふふふと踏まて  
をうらまきと時又網ころ風  
生まれ来て煙草のやめも  
去く髪ふらうにゆふくつる  
左義長のちうとさうさう  
ふくふく雪ふたさうさう  
金屏の松のたひをさるる  
ま〜〜

おきやいつ大佛のけりま

鴉酒堂

浪衣津や四すれふとを

ふくふく雪ふたさうさう

ふくふく雪ふたさうさう

芝へく梅と心のまことあり

落柿舎

名嘯ころ墨しめらうけり

帯ませせら何いよせん柿叩

何いよせら何いよせん柿叩

え保と年

薦成るる一人いよせら

三と女

後を産のたこものゆり



あつて千花かこつておる捨置 園

二の鳥かおつて

くわつれうーははれも浦雲

俳諧集

太神宮法樂

と象

らのまのたしうーいふうれ

声よ報月夜食むうろい寸 益光

まきうた葉の標字雲と死て 又玄

二葉の葉所幸法より 雲菴

有海の子紙と指よりつみ 勝延

藤足とふたぬのあつ火 清里

約り掃よ嵐のかふきうて 光

門細めふる田の中れ寺 蕉

全

山路来て清水せれあ油の汗 菴

かへ香かたのい悲ーと玄

女のくたれ御籠の破とされ 蕉

甚よ付つとて何落ーつ 延

いぬうてに酒とふかお思ひ 野人

陳のかり屋よ傍のこりて 光

まきまにのほまと唇と扱つと 里

ほしめてほたる國の初稻 菴

漏る力城妙う操織る雲と玄

藍のしみつく指くこし人 蕉

神役よ雀<sup>ヤト</sup>まきぬら浸連何 光

返寄ふはゆるさぬの何人

急更と沈の阿やめ成おふて 延

水鶴と追よ龍ー 曉 玄

名は葉粉吸りし毎の夜に燈りる 菴  
惟うふあそやわらうるやと 里  
あつらふ、樂の一品は睡れて 蕉  
釣りの王子の浦はさひたり 光  
声なきくそ長、強る秋の塔 玄  
あつらふ風は眼を吹ちる 延  
後うけておぬれ力、然るまじ 人  
こころもささむいふ、あつらふ 菴  
親ひらり葉より水と流る 光  
まじりしは、凡て葉より代ふ 蕉  
い坊はほとくさ、あつらふ 正木  
ゆりこむ權より、あつらふ 玄  
まじりしは、凡て葉より代ふ 蕉  
經冊のまじり、凡て葉より代ふ 昏人

一幅半

紙衣のぬるも、あつらふ 芭蕉

芭蕉

そとそ、あつらふ、水のみまぬる 乙考  
願、あつらふ、あつらふ、あつらふ 一有  
板屋、あつらふ、あつらふ、あつらふ 村園  
ゆ、あつらふ、あつらふ、あつらふ 蕉  
馬、あつらふ、あつらふ、あつらふ 葛森

。は、あつらふ、あつらふ、あつらふ

稲妻のひらり、あつらふ、あつらふ

世中の、あつらふ、あつらふ、あつらふ

ゆ、あつらふ、あつらふ、あつらふ

命、あつらふ、あつらふ、あつらふ

汐、あつらふ、あつらふ、あつらふ

巨ふしの習ふまはあひて  
乞食卒らの橋の本れ中  
雪より丸雪かひはるるつ

馬蹄のけしれたる侍詩ふ能  
ハツふふる子の教後けねり

湯きや茶葉の系れす

花垣のなほいそめなまの  
やうとくしの秘つけね  
つらとつひはつてぬれね

一里はこれ花吉の子孫や

ふとひいあひつてつ花さうり 去来  
きと雀鳴中の拍子やねの声  
忙うよとさけいねしろに声  
丸をさむ  
あゆよりつらねのすれま

巴の光  
種芋や花のさうり瓜賣あうく  
火燧ふとけハ風うらあり 半残  
酒好のかしらも後いれまをて 土芳  
ぬれうらとれ草の衣 良品  
有明の七ツ歌ある茶院又 残  
ひとこのれと附きうらり 蕉  
けね風又松の戸とちる 櫛合 品

小信の辨又口くこへとろ 芳  
 やとくと矢洲のほふ歩の冷 蕉  
 多賀の抄子もつ川のこころ 残  
 手松のともとも持とる三輪組 芳  
 人よとりほく甚名口をくし 品  
 萱州のまもかりぬ急とて 残  
 秋たけの蟬の啼死ふりり 蕉  
 かくまてる屋根まらる風の音 品  
 こ月まて青丸藍瓶のあ 芳  
 いらさうほの花れは像は暖とらて 蕉  
 振のつ来る水のうりりえ 残  
 猫れ眼の六ツ掬<sup>カキサキ</sup>核に四ツかッ 芳  
 あとのともうひの鐵蘿蔔と切 品  
 かうとも病入あれ借とぬく 残

たくく書いて出る髪結ひ 蕉  
 ちりくに衾屋の形は取ちし 品  
 冬至の妻やお思ひま次 芳  
 化粧もよそへも思つるえ 蕉  
 まことえ振のほしかり々々 残  
 朝夕よれくひのまき暖まつ 芳  
 いとあつれから母くまの尻 品  
 田鼠の指喰ひあはは有沈て 残  
 風ひえそむる年のふれ核 蕉  
 露しとれ紙のまらさう程も 品  
 死つとい人の何よ来るべき 芳  
 外風や吹起されてかいまぬ 蕉  
 筆紙もあせの鳥鳴出す 残  
 きりくといと一の花よ指ひ 芳

吾宗よ直の大報うちろり品  
つこ

花見

芭蕉

木れもとふけも給もはろり邦

西日のとつ小能天幸こ 珎碩

総人の風いれりま書て 曲水

と死もあふぬを刀の鞘 蕉

力もちて假の内裏の司石 碩

叔白はくる拙りやとこ 水

鞆とるよ累駈よ秋のまで 蕉

名いさゆくにほり替る雨 碩

入り込は流の涌湯はる暮 水

中もせいのきれふ伏 蕉

つるも城雀一方へあけり 碩

李

月そり筋より急はつう 水

物ねり身小物冷てまらて 蕉

力える虫の神おもとあ 碩

秋風の船とこはるかまむ青 水

下りくもや白子若松 蕉

千般よむ花の夢うの一方田 碩

巡礼死ぬる道はけりふ 水

何よりも惚れつそらねる 蕉

みかくはとの力とふかこ 碩

羅よ月紙いとそふ御代 水

態耽つるれと後流ひらう 蕉

手来り死の冥ちり頑よ 碩

酒てもけらるはらぬらん 水

双女の目とのそくやん言かり 蕉

わづの持佛よむり入るは 碩  
中しに七間小居れい香もは 水  
我名ハ里のふりものし 菴  
ふくやれていぬ痛の肝と葉 碩  
石板くまのりる 水  
花をくればちやう拓かき拓て 菴  
たぐ四方なるまをるの 碩  
一費の徳むつーと返り 水  
医者よの業い飲ぬかぶ 菴  
くれば嘆ハ芳野けいん 水  
地よくふくまれ山中 碩

當見

本なるえやぬれ勝てまふ

在

言のむねよしも流しに 凡兆

幻位養よ入て

えたのむね本もありまむま 曲翠  
ほくおに背中もてやふり 乙洲  
翠とくまのしも苔の 乙洲  
くもも羽もつた凡の 乙洲

後下ゆく人よ

歌のちやうとてまは 野水  
くつとりのけまつくまの山 野水  
海山よ五力ふそくや一ら 凡兆  
新道に岩梨をさるれ 千那  
細粒のちとれふや、文の山 酒堂  
郭と鳴戸 水の水のこいこり 犬星  
とくしとやとも小糸も推か 如行

紙帳とらうて

おもひのりあはれおろけとちかひ 野狂

麦の粉とちかひ

一袋ふりかきお田のこゝろ 麦 之遣

を左に遣

キうておぬけしぬいさぬぬけしぬ

俳諧集

大津奇香亭

芭蕉

いろはのりおぬけしぬいさぬぬけしぬ

せめて涼しけきるの青 登 奇香

ふりかきお田のこゝろ 麦 尚白

ふよいよのりおぬけしぬいさぬぬけしぬ 自笑

松の木は秋風ささくおぬけしぬ 通雪

松風やふんて琴の糸より 松浦

うかれたる女ふふれて目の様も 香

久敷の腕のよりの意くささ 蕉

ふりかきお田のこゝろ 麦 芭

折の裳しんかきか ぬい 雪

中しんかきぬいさぬぬけしぬ 夏

ほ世の介れ清きより 寺 白

ありしぬいさぬぬけしぬ 同

杖を枕よ 菅ゆきの 山

箱毒にぬいし 社拜しぬい 蕉

横しぬいさぬぬけしぬい 芭

花散らすぬいさぬぬけしぬい 白

雨の肥たる峯のこゝろ 香

麦飯よぬいさぬぬけしぬい 雪

されたらきよんゑの音す。山  
この一々の遊まつた松の枝 香  
出よことごとく入舟のしるし 官に  
左心のころこ悲しん種四ヶ墓 一語  
追られて麻の子と捨てし 意  
中の秋暖風あふ平紙代り 雲  
云縁ちりく萩と踏おらる 香  
うと人とをきこい後ら月あ 白  
大勢まへておつたりれ女 香  
一糸や二糸おらうれ糸袖より 洞  
責の子若こは比叡の山風 白  
ころろしとさふさふさふさ 江  
茜采紙あつて帰る野道 雪  
酔ひぬけ伯父の息こゝんさる 香

波の妹ろ子紙着小来る 籠  
機くくむま毒戸小花の香と捨て 籠  
よれまゑくくくくくくく 白

俳諧集

まゝ髪ぬけ花の下や紙くさ 芭蕉  
八月紙とくは西志の力 之道  
あま塩の彌ろくろ杖の末 珙碩  
刈そらくたつかつてそれ 葉  
何風ふ舟の波のわくしと 道  
麦のふらふ紙たたくそそ 碩  
舟こて一ひまこくろ従ひ 舊  
願はるそく意聲の 道  
と一織の帯ふくし服もめて 碩  
久しと銀のまゆ柳屋 芭蕉



山と車の竹のめら幼氣道  
かふと谷より踊鶴となり碩  
力乾よ夏の若毛紙進うけて蕉  
細もさつとふも踏とつうに道  
このくさも布子一二枚の重たき風碩  
すこもゆきまのれ賃たよる道  
時しくふたもにさつめ新留道  
置て来つらうしてさ雀うこや碩

合款の本の竹のむいそ星風竹  
草の戸をまれば植養に危は  
羽の本よ鶴鳴かなる塚のうら

おれーろうねもともえよ為方叔  
土書

聖

望田

病丁の杖をたはれて接ぬふ  
匠の匠の小波老はつて  
付る中田のつら様のさむむ  
木枯ち類とわいさむ人の身

智月亭

おれの厄のなれしや志賀れ雪  
紅雪の雪といふやさゆら雪  
智月

乾放のなれところけつる雪  
其角  
け本戸や杖のこつれても雪有

猿養

さつれおも刷いつらうぬおの雨  
去来

一吹風の木の葉も川に流す 芭蕉  
照引の柳の傍の川流して 九兆  
たぬき成林と藤張の弓 次郎  
はつらんよき遠くを育れり 蕉  
人よれれをらんあゝの葉 来  
書ふらん書信まうらう秋れて 邦  
とよこらんよきあうちをばは衣 兆  
行事もなきをのうらひ給あり 来  
里んらんそまて平の貝吹 蕉  
はほもつらんよき年のねを思ひ 兆  
美雲の花のころりくとまら 邦  
及おひんきまされしを寄れ 蕉  
云里あまりの道こころちり 来  
けきも盧同く男居ありと 邦

五

さあつとねる方の路 芭蕉  
昔ふらん花よかきふらん水新 蕉  
ひらり葉りし今朝の風を 来  
ふらん花よ二日れもの冷て置 兆  
雪まよふらんよき晴の北風 邦  
火と雨に言れりてる茶も 来  
何とよき度いよき時 仕方たり 蕉  
瘦骨のすく記あき力あは 邦  
隣城くうて車引こむ 兆  
うき人を扱穀恒よりくせん 蕉  
の中布もこの刀こうし出す 来  
せりけり帰て成成さし 兆  
たをひ切らり死ねひん 邦  
青天よ有明方の朝何け 来

湖水の秋の比良のゆき  
染のやまきき益れて秋とよむ  
布のきよの風のうきき  
押合て縁のいすこきうり  
たらののこのよきふた  
一ここの秋つらきふた  
枇杷のふらきふた  
俳諧集

園風

あつみや雪がとれぬ  
さよりが花のまき  
暦よむ人ふた里も安く居て  
かひ牡丹の名はひろけり  
歌しよ方とらての上まき  
扇の角はけりと春まき

園風

春よあふ前橋の朝はさけ  
こり中つよよに監り  
馬の鞍ふちてまき  
おこりとおはは連繩の  
伊勢の海は素直を  
敵の首はたれくる古  
村人の罪の返は  
新に門はたれくる  
造り出た今や年れ酒と  
力も名はりのやき  
殊うりや溝は穂  
ふきまはは芭蕉  
とまきの樂は衣  
出りかたる饅頭の汁

芭蕉  
木白  
額  
配  
麦  
風  
芳  
品  
残  
刀  
風  
素  
蕉  
芳

このたよ遊イニオシとのほろも今路、白  
肩ふ折ぬる供のこころし、顔  
残る雪男にんちん里つり、風  
放てたの歌と遊、暮る、暮  
葬礼ふ志ほる、馬の表より、品  
女嘆こころ井の戸のうち、芳  
後報の亥ぬ子の餅と配ると、菘  
脊中、ハきく既うちける、白  
志くれら様の中急なう、乳、額  
みぢひこころ様はの奥、刀  
預よまをと唇く、烏帽子傾けて、白  
ふくこころし、巾、袋裏、残  
七夕にうたとわたりたる、漆ふと、風  
家賣りて世はあ、乳あさる、蕉

蕉

柿の本の枝したりの実と持て、妻  
花てこころ、角一、名やふまゝ、芳  
被刈者の踏よまはたる、つら、額  
お中の星然はく、心母、こころ、白  
春の血あ、きく、啼ぬ人、残  
松ハ一本山の外、風  
を食してたよまたる、薦す、蕉  
雞子し、糸、怖、い、ふ、死、芳  
春雨、ハ、く、解、の、た、て、マ  
おもいぬ方の、教、冬、残、は、む、ま  
試ころ、ハ、人、と、禁、あ、り、入、控、と、品  
家、王、の、お、た、た、た、色、は、い、く、同、白  
引、く、く、あ、や、め、の、階、ま、ね、た、け、に、芳  
圓の、堂、ふ、い、て、こ、ころ、く、あ、ら、書、風

月れあまつ〜教ふるん蕉  
念うら〜急のいこかひ刃

壬生山家集

百歳

みちよりのやふ斗の早は前

笛の音こぼる曉の橋 式之

一はうい産のまこ藤る松たて 芭蕉

よ〜〜れ前〜田面遠け〜 夢牛

盃のふみ成あつためん言わむ 村鞍

腕押はら兒夢の衣ま 槐市

云殿の簾を中叶た〜ひ 梅額

系良の小鉢買も箱に下りし 蕉

地灯とこ付せといひ〜陸付 牛

紙衣羽織ととこ〜白いせ 之

酒〜残えより人よあきて 百

廿八

ふろと名條の遠と〜く〜 額

有物の匂お〜鴨又餅と〜せ 市

米はくらさる青山の 秋村

子か〜ひの緒を昨よあせらる 蕉

瓶子よ係〜く出と白糸 之

杖つとてのほれ〜坊ら〜れ 額

空あ〜くおよほ〜とめ急〜り 百

〜と〜て猿〜小唄成〜せ〜り 村

おま〜簾の屏風よ〜昼〜夜 類

面うけ〜おか〜たる 唐園 蕉

あ〜えの〜う〜り 香風よ〜ら〜り 牛

〜ら〜り〜と〜あ〜も〜お〜き〜の〜さ〜ん 之

ひ〜〜ら〜る 崔菽ら〜〜ゆ〜く 村

紫雲の市は〜り〜酒買〜て 市

昨日の鐘鼓の月も晴たり之  
いふ妻こみ漕ふら山渡りも村  
あふけこやあおの級百  
ふともあつてくさあかあつて  
ちとけあまうくこちる棟札之  
持衣よ下ゝ糸の烏帽子あ傾し額  
幕成志はれい皆けりこちる蕉  
籬のうたふもこれの益あれや之  
細うの泣よとちる陽を市  
おまの射場やらんと弓挽て百  
籠よはちりすこれ一ふと村  
物の親

上郡まこと

昨日ハ外成友と申と一とこれ

芭蕉

芭蕉

きよ土氏の供物納むる 示石  
水さるる芦のぬけりく産唱て 凡非  
家よあつてくさあ表構の声 去来  
ふよとこふもふ力の於人 景桃  
秋は寒あつて虫食の杖 二州  
實入よとこ糸級の早稲のこち 史邦  
星進くふる馬の足 蹟 玄哉  
押つて大ふくれり多う糸石  
奉加よ出る僧の首 途 蕉  
あゝ川や岸屋の土ごふしおと 来  
なもたれし荆はえたり 兆  
洗濯よとこれ歩けり業 州  
猫のいゝ又の言も眼めし 桃  
上いゝ下いゝもとこあ思ひ 蕉

皆白張のふきほあそり  
 高麗へは名ふところを  
 雲の海は二の瀬の淡  
 雲トリ麻たぐぬきに  
 雨ほろしと南へあり  
 糸解隣ついでおろり  
 月残るそくてもつら  
 らう後短あふら九十  
 ねさくつとて又雲  
 雨ふる宮は後若も  
 藤原の里のおてく  
 鹿原のうらうらつた  
 野中ま捨る鯉の有  
 石細く小雨ぬるる  
 邦 桃 来 哉 桃 来 桃 邦 春 邦

世ハヤノ才芋焼て  
 秋と子に藤波妻小  
 巾の麻衣に小は山  
 泣しむ小さま鞋は  
 たてこの飛の風は  
 雲白小舞表と又も  
 霞はあへる舞の羽  
 邦 桃 来 哉 桃 来 桃 邦

糸を出てこ州の  
 春は  
 人は家  
 乙州の  
 智

わさとしへんはし  
 邦

